

2019年度三重大学人文学部における

# F D 活 動

報 告 書

2020年（令和2年）3月

三重大学人文学部



## 2019年度FD活動報告書に寄せて

人文学部にFD委員会が設置されたのは2003年のことであり、本学部のFD活動は今年度で17年目を迎えました。FD委員会は毎年「FD活動報告書」を編集してきたので、これまでの活動の記録を経年的に把握することができます。その報告書よりまとめると、人文学部のFD活動は、次の5種の取り組みから構成されています。(1)主にカリキュラム単位で行われるFD研修会、(2)多様な講師を呼んで開かれるFD講演会、(3)学部生・大学院生を対象とした授業評価アンケート調査、(4)教員を対象とした授業運営や発表会等に関するアンケート調査、(5)教員対象のFD活動に関するアンケート調査。かつて行われていた教員による授業参観が実施されなくなったこと、一方で大学院に関するFD活動の内容が増えたことを除けば、こうした枠組みは、基本的には、これまで大きく変わっていません。それぞれが、人文学部のFD活動において重要な意味を持ち、それ故に継続されてきたといえます。

しかし、例えばFD講演会の内容に注目してみると、そのテーマ設定には変化が見られます。2004年度、2005年度、2006年度においては、他大学(佛教大学、京都大学、和歌山大学)の教員をお呼びして、それぞれの大学の教育に関わるFD活動の実践例から学ぶという内容でした。その後、2007年度には「大学における不登校学生への対応」、2008年度には「ハラスメント事例に対して大学がすべきこと、できること」というテーマになり、テーマ設定の幅が広がってきたといえます。最近の例では、2017年度の講演会は「不登校学生等への対応について」、2018年度は「教養教育におけるアクティブ・ラーニング」、2019年度は「本学における留学(受入・派遣)の現状と今後の課題」というテーマです。授業を進める上での工夫を考えるというだけでなく、様々な側面で学生支援が必要とされるようになり、それに合わせて、講演会のテーマ設定も変わってきたように思われます。

近年、大学に対する社会からの視線は、全体的に厳しくなっているように思われます。大学ではどのような工夫を重ねて、どのような教育を行っているのか、それがどのような人材の育成につながっているのか、こうした問いかけに真摯に向き合って、実践を通して応えることが大学には求められており、そのためには、やはりFD活動の充実が不可欠です。人文学部におけるこれまでのFD活動の蓄積を引き継ぎ、その成果を検証して、新たな試行・改革も加えながら、今後の展開につなげていくことが重要と思われます。

2020年3月

三重大学人文学部長 安食 和宏



# 目 次

2019年度FD活動報告書に寄せて

I. 2019年度FD活動の総括	1
II. FD研修会（6月FD研修会）	3
III. FD講演会	9
1. 9月FD講演会の記録	9
2. 講演会配付資料	32
3. 講演会アンケート結果	40
IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」	47
1. アンケートの概要	47
2. 分析結果	59
V. 教員による「授業に関するアンケート」	61
1. アンケートの概要	61
2. 分析結果	61
VI. 大学院に関するFD活動	69
1. 大学院生による「授業改善のためのアンケート」	69
2. 「三重の文化と社会」報告会への教員の参加	70
3. 大学院に関するFD研修会	74
VII. 教員による「FD活動に関するアンケート」	77
1. アンケートの概要	77
2. 分析結果	77

巻末資料 1 授業アンケート（学びの振り返りシート、授業改善のためのアンケート）

巻末資料 2 授業に関する教員アンケート

巻末資料 3 「三重の文化と社会」報告会、修士論文発表会に関する教員アンケート

巻末資料 4 F D活動に関するアンケート

巻末資料 5 2019 年度 F D 委員会年間活動

## I . 2019 年度 F D 活動の総括





## I. 2019年度F D活動の総括

人文学部では、毎年定期的にF D活動を行っており、それぞれの企画は教員間でも定着している。学部教育のみならず大学院教育を含めて教員全員が参加し、教育の工夫を互いに検証してきた実績は、外部評価などにおいても好意的に受け止められている。だが一方で、企画のマネリ化が指摘されることもあり、また講演会・研修会などで示される理念・理想と現実とのギャップを感じる者も少なくなかった。本年度のF D委員会では、こうした状況にも鑑み、きれい事ではなく参加者にとって実際に役に立つ、有意義なF D活動を行いたいと考えた。ただ、毎年行っている企画でも、継続しているからこそ意味のあるものは、引き続き今年度も実施することとした。

毎年定例の研修会としては、6月に両学科計8つのカリキュラム単位に分かれて行う、「前年度の授業アンケートの自己分析と授業の改善方法」を課題とするものがある。小グループごとに報告者を定め、授業のやり方と学生の評価をめぐり、自由に質疑応答を行った。その結果は別掲の通りだが、専門分野や世代を越えて意見を交換することにより、自分の授業方法を見直す貴重な場になるとともに、学生指導に関して情報共有を図る機会にもなっている。

9月には、例年外部の講師を依頼してF D講演会を開催してきたが、今年度は学部の事務職員（担当された時点では他部局へ異動）で、以前は国際交流チーム留学生支援室に在籍されていた、郡一樹氏に担当頂いた。いささか異例の人選であったが、これは私たちが課題とした留学生への対応の仕方というテーマについて、現場レベルで最も詳しい方であったからである。三重大学の理念・理想や留学生に関わる様々なトラブルを含む諸課題、そしてその解決策を、人文学部の実態に合わせて詳細かつ分かり易くご報告頂いた。本年度のF D活動の大きな成果として位置付けられると考えている。

講演会参加者に対して行ったアンケートは、後刻にメールでの回答を求める形となってしまったが、回答者の実に75%が「大変良かった」とするように大好評であった。そして特筆すべきは、自由回答欄に今後取り組むべき課題や解決策の提案などが多く寄せられたことである。よりよい学生教育を目指す本学教員の熱意の表れであり、誇るべきことであろう。同時に、これらの提言が今後有効に活かされていくことを願いたい。

例年11月には、大学院教育についてのF D活動を、地域文化論専攻、社会科学専攻それぞれ2グループ、計4グループに分かれ、6月の学部F D研修会と同様に各一人の教員が報告をし、質疑応答を行ってきた。だが大学院生を持つ教員の人数に限られる上、大学院教育は一般に指導教員との個々の関係において行われるため、例年報告者の人選に苦労するだけでなく、研修会でも課題意識が共有されにくく、議論も低調に終わる傾向にあった。そこで今年度は、全教員が関わり得る授業科目「三重の文化と社会」を取り上げ、長年同授業を担当されている法律経済学科の豊福祐二氏に報告をお願いし、これまでの成果と今後の課題を議論する場とした。

学生による「学びの振り返りと授業改善のためのアンケート」は、授業中に紙媒体で回答する形からweb上での回答へ全面的に移行して3年目となるが、全学のなかで人文学部は回答率が低いことが指摘されている。授業中にスマホを使って回答させることも推奨

されているが、今後の課題として意識したい（なお、後述のようにその原因はシステム上の問題もある。人文学部ではアンケート対象科目を専任教員の講義に限定し、非常勤講師担当科目、演習科目や資格科目等は除外する原則を取っているが、Webアンケートの回答システム上ではこれらの科目も回答対象に残るため、一部学生がこれに回答してしまう。それが全体の回答率を下げる大きな要因であり、この点は誤解のないように願いたい）。ただ、授業の総合的な満足度は、例年通り4点を超える高水準を維持している。自由記述においても、本学部の授業に対する満足度は高いことがうかがえる。

大学院生によるアンケートは、昨年度は回答数が極めて少なく、集計・分析するに至らなかった。その反省から、大学院生指導を担当する教員に呼び掛け、回答率向上に努めたため、何とか有意な回答数を得ることができた。ただ、本研究科の規模に鑑み、大学院生、指導の教員にとって意味のあるFD活動とは何かを、改めて検討する必要がある。昨年度から導入された「複数指導体制」についても、その実態と効果を検証することが求められるが、今年度は取り組める状況ではないと判断した。

FD委員会はメール審議を含め年間で6回開催し、講演会、研修会に際しては随時打ち合わせを行った。3人と少人数のため意思の疎通を図りやすく、チームワーク良くスムーズに運営ができたと考える。FD活動は、あくまで「よりよい教育」を行うためのものであり、事務作業に労力を割くことになっては本末転倒であろう。今後も効率的で意義のあるFD活動が行われることを願ってやまない。

2019年度FD委員会委員長 塚本明

## II. F D 研修会



## Ⅱ.F D 研修会

### 1. 6月 F D 研修会

日時：2019年6月12日（水）14:00～15:00

テーマ：2018年度実施学生アンケートの自己分析と改善方法

6月のF D研修会では、例年通り前年度（2018年度）に実施された「授業に関するアンケート」の集計結果を用いて、10人前後のグループごとに、報告と意見交換が行われた。各カリキュラム単位の研修の概要は以下の通りである。

#### [1] 文化学科

##### (1) 日本地域

出席7名、欠席1名

[授業アンケートについての報告・議論の概要]

◇報告者：川口敦子（記録者：塚本明）

[報告の概要]

担当した講義5科目（教養3、専門2）について、まずテーマ、配付資料、提出課題、評価方法等を一覧表で示し、授業改善の工夫としてリアクションペーパーの活用、実物資料の回覧、複製文献の配付などを行っていることの紹介があった。続いてアンケートの分析として、項目ごとに詳細な分析がなされ、教養教育においては同じ講義内容であっても受講生の所属学部により大きく評価が異なること、提出課題や出席状況と満足度の相関性、教養・専門別に「4つの力が成長したと考える項目」との関係などについて報告された。そのほか配当教室の問題、moodleの使い方についても言及された。

[議論の概要]

前提として、受講生の分布（学部、地域等）が確認された。教養教育で同じ内容をリピートで開講しているにもかかわらず、満足度が著しく異なるのは、授業内容よりも受講生の問題であるとの指摘があった。また受講者数や受講動機（空きコマ故の受講）に鑑み、機械的に負担コマ数を割り振る教養教育機構の機能不全を指摘する声も出た。

試験について、出題形式のほか受講生にどの程度情報を提供するかも話題に上った。教養教育の場合、高校時代の延長で教科書に基づく出題範囲の明示を求める傾向があること、また欠席回数による試験を受ける資格などをめぐって、意見交換がなされた。

このほか教室配当についての課題や、前期・後期で関連する授業を行う場合の工夫などについても意見が交わされた。

## (2) アジア・オセアニア地域

出席 8 名、欠席 1 名

◇報告者：濱田武志（記録者：三根慎二）

[報告の概要]

2018 年度の開講授業実績に基づいて、1. 学習効率・効果（中国語学に関して各自の興味を開拓する自主性の涵養）、2. 学習機会について（深く・広く学ぶ機会の提供）、3. 授業実施状況・予定（2018 年度以降）、4. 改善案（中国語学全体がわかるような授業あるいは内容の提供、基礎学力（語学力・思考力・知識）の向上）、5. 今後の課題（授業内容の全体的な組み替え、詰め込みすぎの回避、リアクションペーパー等の活用など）について、資料に基づき報告があった。

[議論の概要]

中国語学の入門的な授業の可能性について

- ・毎年、中国語学の概論的科目があると望ましいが、教養科目で中国語学の基礎的科目はできないため、専門でやるしかない。国語（漢文）の教職科目という縛りがあり、枝番増加は容易ではない。
- ・他の科目との関連性（接点）を高めたり、他の科目を履修することでカバーができるのでは？言語学の教員も多く、関心を持っている学生も多い。

言語科学概論 C・D との関連、新設科目の可能性

- ・他は別の先生が担当しているようだが、そうでなければ一つにしても良いのではないか。
- ・セット履修の縛りはないが、必修科目にもできない。新設科目を設置するにしても、教職（漢文）と関わりを持たせないといけない。
- ・分野でのワードマップを作ってみてはどうか。

卒論指導の体制

- ・現在は担当科目の演習を受講している。人数（3 年生 2 名）が少ないので、学生とのコミュニケーションをとれている。
- ・制度的なものは手をつけないが、指導学生に対しては卒論演習など以外で、自主的に卒論指導をしてみても良いのではないかと考えている。

## (3) ヨーロッパ・地中海地域

出席 7 名、欠席 3 名

◇報告者：村上直樹（記録者：菅利恵）

[報告の概要]

専門講義科目の「ヨーロッパ・地中海の民族と文化（人類学）」と「ヨーロッパ・地中海の社会（社会学）」に関して、授業方法や授業アンケート結果の説明が行われた。

当該講義の目的は知識の提示と伝達である。ヨーロッパについての基礎的な知識がないことが多いので、知識を丁寧かつ確実に伝えることを目指している。そのために、講義においては説明図式を多く板書し、学生に講義ノートをとらせるようにしている。毎回、板書と講義を補足する資料プリントを配っており、5 分程度の映像資料もなるべく見せるようにしている。

授業アンケートの結果はすべての項目において非常に良い。(4.7 前後。)学生の反応が不確かな部分もあるが、特に改善が必要な部分は見当たらないように思われる。

[議論の概要]

- ・スライドの提示は、教員にとって楽な部分もあるが、多くの学生はスライドを見るだけでノートに取らない。教員が板書をする、それにうながされるようにノートを取り始める部分もある。また、板書の方が授業の流れに応じて臨機応変に柔軟に対応できる。今回の議論を通して、板書中心の授業方法の有効性が確認された。
- ・議論の中では、学生の集中力を90分間もたせることが難しいという意見が多く出された。学生の集中力を途切れさせないために、板書以外にどのような工夫が可能であるかについて話し合いが行われた。途中でグループワークを挟む、質問をする、小休止をとる、レスポンスペーパーなど、各教員が実施している様々な工夫が紹介された。

(4) アメリカ地域

出席7名、欠席1名

◇報告者：澤田治（記録者：中川正）

[報告の概要]

講義科目である「英米の言語A」および演習科目である「言語化学演習D」の授業の内容、方法、学生による評価の分析が報告された。専門的な英語による文献の内容を事前に読んでこさせ、授業の中で学生に積極的にかかわらせる工夫が効果的な授業をおこなうポイントだということが示された。

[議論の概要]

- ・英語の文献を深く読ませる工夫について教員間の情報交換がなされた。
- ・研究を実証的にこなわせるための統計学などの知識をどう学生に教えるかに関する情報交換がなされた。
- ・4年生後期になってから卒論作成にあわてる学生がいる現状を、どのようにして改善できるかに関する教員間の意見交換がなされた。

[2] 法律経済学科

(1) 統治システム履修プログラム（法政コース）

出席8名、欠席0名

◇報告者：麻野雅子（記録者：前田定孝）

[報告の概要]

専門PBLセミナー（地域社会連携）の実施に関連して

<前半>豊福先生と森先生が担当

1回目に豊福先生から、課題（大門商店街の活性化）の説明

2回目に森先生から、課題（農商工連携）の説明をしてもらい。

各班（1グループ6名ぐらい）がどちらか選んで、最終回に発表。

<後半>深井先生と私が担当

課題は一つ。地域課題への取組（互助）を考えるというもの。

深井先生から課題の説明。私も補足。

映像も使う。

班で自分たちが取り組みたい地域課題とその取組方法について発表する。

- ・変更してよかった点

(1) 課題に取り組む時間が増えた。

前は3回で、NP0の構想をしてもらっていた。

理念が中心。どういう社会にしたいのかを考えるように促していた。

実現可能性についての評価は不足。

[議論の概要]

以上の報告を受けて、討論に入った。そこでは、参加者から、専門PBLで実際に行っていることが紹介されるとともに、そこで問題として感じている(専門PBLの担当者1人あたりの回数問題)に言及された。そこでは、現行の「1人3回」が今年度後期から「1人5回」ことにともなうさまざまな工夫について発言された。

**(2) 生活法システム履修プログラム (法政コース)**

出席6名 (オブザーバー1名)、欠席0名

◇報告者: 藤本真理 (記録者: 田中亜紀子)

[報告の概要]

報告者が担当する教養教育科目「法学C」の授業アンケート等をもとに、授業改善の取り組みについて報告が行われた。

「法学C」は労働組合等からのゲストスピーカーを招いての授業であり、アルバイト等に関するグループディスカッションも2回行っているユニークな授業である。本年度は、1度に話してもらうゲストの数、講義内容、質問の受付、出欠、資料配布、そしてグループワークについて毎年見直しを行っており、本年度は質問の受付と資料配布でmoodleを活用すること、初対面でいきなりディスカッションに入るの難しいという学生からの声に応えて、予め座席を指定し、毎回小グループで話し合わせる機会を設けることで、グループディスカッションに入りやすい環境づくりを心掛けている。

[議論の概要]

事前にmoodleに配布資料ファイルを掲載することで、配布に関する時間ロスを省けるとともに、受講者の予習にもなることが期待できるペーパーレス化については、配布資料として紙を使うかどうか、あるいは配布資料と予習との関係について議論が行われた。また、今回の授業の特色の一つであるグループディスカッションについては、15グループそれぞれにファシリテーターを配置する手厚いものであるため、同様の試みを行う場合の人手の確保が難しいといった意見が出た。

この他、「法学」は教養教育科目であるが、受講者の半数は法律経済学科の学生であることから、教養教育科目と専門科目における法学科目の講義内容面での工夫に関しても意見交換が行われた。

**(3) 地域経済履修プログラム (現代経済コース)**

出席7名、欠席0名

◇報告者: 諏訪克之 (記録者: 川地啓介)

[報告の概要]

(1) 2018年度後期に開講された専門PBLセミナーA (地域福祉・司法福祉) について、下記の通り報告された。

① 司法と福祉をテーマとして教員4名で担当している。



②3回分（初回：講義・目標の提示・各グループのテーマ設定、第2回：グループ内の役割分担・リサーチ、第3回：発表・小レポート）を担当した。

③各グループがそつなく発表資料を準備し、小レポートを通した振り返りで改善点を抽出できる学生が多かった。

④課題として、他グループの発表への自発的な質問が少ない、テーマ設定に手間取るグループがある、一部の学生に負担が集中することがある、発表内容を深掘りすることがない等があげられる。

(2)2018年度後期に開講された専門科目「福祉経済論」および教養科目「経済学B」について、下記の通り報告された。

①どちらの授業も講義形式の授業で、スライドと同じ資料を配布している。コミュニケーションペーパーにより、毎講義の理解度を確認している。

②今年度は、前提知識を持たない学生への対応を行いたい。

③2018年後期から着任したばかりだったので、授業アンケートで試験の出題形式に関する質問が複数あった。

#### [議論の概要]

①専門 PBL セミナーについて、今年度後期から各教員の担当回数が5回に増えてグループ作業の時間を確保できるのではないかと、各回に課題を設定するなどの工夫をしてはどうか、2年次の専門 PBL セミナーBでは学生への要求水準を上げてはどうか、やる気のない学生への対応としてグループの結束力を高める仕組みの導入や moodle を活用した参加度の見える化が有効ではないかと、グループ学習の適正人数は最大5名程度である、などの意見が出された。

②授業アンケートについて、授業時間内に受講者にサイトへのアクセスを促して回答させると回答率を上がるとの意見が出された。

#### (4) 企業経営履修プログラム（現代経済コース）

出席5名、欠席0名

◇報告者・記録者：堀内義隆

#### [報告の概要]

「日本経済史」、「近現代アジア経済史」の2科目につき、以下の報告がなされた。

- ・授業アンケートの結果は回答者数も少なく、そもそも参考にしていない。
- ・学生が通史のイメージを掴みやすいように授業構成を変更している。
- ・配布資料は、試行的に穴埋め中心にしてみた結果、試験の結果が悪化したので、今年度は元（たくさん書き込ませる形式）に戻している。

#### [議論の概要]

報告に基づき、以下のような意見が出された。

- ・高校で学習しているべき基本的知識に欠ける学生が多いので、「補習」のような授業も必要ではないか。

- ・学生の理解力の低下が著しいので、「レジュメのレジュメ」を配布するなどの工夫が必要。
- ・図表の読み方などは、行政職にも必要な技能なので、積極的に教える工夫が必要。
- ・その他、報告者の授業内容とプログラムの他の科目の関連について、いくつかの意見交換がなされた。

研修後半には、「専門 PBL セミナー」の実施を踏まえた問題点や意見交換が行われた。様々な意見交換がなされたが、とりわけ以下のような重要な指摘がなされた。

- ・2019 年度から学生の希望を考慮しないクラス分けを導入したため、学生の動機づけをうまくできないと授業として失敗する恐れがある。
- ・教養のアクティブラーニング科目と専門 PBL セミナーのリンクが出来ていない。その位置づけを教員自身が把握できていないし、学生にも説明できない。

## 2. 11 月 F D 研修会

11 月 13 日（水）に大学院教育に関する F D 研修会を実施したが、その内容については、本報告書の「IV. 大学院に関する F D 活動」に記載した。

### Ⅲ. F D講演会



### Ⅲ. F D講演会

#### 1. 9月F D講演会の記録

日時：2019年9月11日（水）14:00～15:10

講師：郡一樹氏（三重大大学入試チーム [元人文学部学務チーム、国際交流チーム]）

演題：「本学における留学（受入・派遣）の現状と今後の展望」

「人文学部F D講演会 2019年9月」

【司会】 皆さま、これからF D講演会を始めたいと思いますので、ご着席をお願いいたします。

9月のF D研修会では毎年講演会をやっておりますが、今年は留学生問題を取り上げました。グローバル化した社会ですから、三重大から海外に留学に行く、あるいは留学生をこちらにお迎えする、これは本学、人文学部にとって非常に大事な課題であることは間違いありません。しかし、実際に留学生を迎える際に、受け入れ方や、あるいは受け入れた留学生をどのように指導するのか、そういったことについて、いろいろ課題を抱えている先生たちも多いと思います。そうした声を聞きまして、今年は留学生問題のF D講演会をやろうと考えた次第です。

今回は留学生問題のスペシャリストで、皆さん誰もがご存じの有名な講師の先生をお迎えいたしました。郡一樹先生です。ご存じの通り少し前まで人文学部学務チームにいらっしやいましたが、その前は留学生支援室でご活躍でして、またアメリカの、お生まれではないけれども幼少期をアメリカで過ごされて、日本語よりも英語のほうが得意だという先生です。そのキャリアから、三重大として留学生をどのように受け入れるのか、人文学部としてどういうふうに対応するかということについて、一番事情に詳しい方であるわけです。

今回、事前に皆さまから留学生問題に関してどのような課題を抱えているかという点について、メールで質問や意見をお寄せ頂きました。それらはすべて郡先生に前もって伝えております。そういった様々な課題の解決の糸口を見出だしていただき、そうした目的をもって、これからご講演をお願いしたいと思います。では、早速ですが、よろしく願いいたします。

【郡】 皆さま、お世話になっております。入試チームの郡です。これをつくり始めたころはまだ学務でしたので、人文学部学務担当ということだったんですけども、7月1日から入試に変わりましたので。年度初めにFDの先生のほうから、実は今年のFDで留学のことをテーマにしようと思っていると、学務で働いたときに呼ばれまして、「郡さん、課長クラスとかで、どなたかいい講師がいないですかね」というお話があったんですけども、その後すぐに「本当は、課長級、副課長級の方が講師になってしまうと、どうしても国際の理想とか目標とか、大きなお話になっちゃうので、できれば、もっと現場レベルのお話ができる講師の方がいいですね」と、僕を目をまっすぐ見てお話をされましたので、半分本気、半分冗談ぐらいで、「僕でどうですか」というふうにお伺いしましたら、即答で、「あ、いいんですか」みたいな話になってしまって、このような状況になっております。

引き受けた後に思ったんですけども、先ほどご紹介いただいたとおり、私、採用時は広報室だったんですけども、1年たつてすぐに留学生支援室に異動になりまして3年間、その後、人文学部の学務で3年間お世話になったということで、国際のことについても、人文の実情のことを知っている者、人文学部に特化したお話ができる者としては適任なんじゃないかなと。いい人選だと思います。(笑)

ですので、本日は当初のご希望のとおり、大学全体のお話という硬いお話は置いておいて、というより、もう僕、入試チームの職員ですので、そういった目標とか、三重大学はこうしていかないといけないというお話ができる立場ではございませんので、現状と言いますか、人文学部では個人的な意見を申し上げて、このようなことをしていったらどうでしょうかというようなアドバイスをできればと思います。もしかしたら、本日の説明は皆さんには釈迦に説法と言いますか、知っているわということがあるかもしれませんが、ご理解いただければと思います。今日、座ってということなので、座ってお話しさせていただきたいと思います。

本日のテーマは、「本学における留学（受け入れ・派遣）の現状と今後の展望」ということで、それっぽいタイトルにさせてもらったんですけども、これも前回の教授会で事前に予告すると言われたので、このようなタイトルにさせていただいたんですけども、実際は人文学部の留学のことをきちんと教えますぐらいの感覚でいていただければと思います。

まずは、数カ月前まで人文におりましたけれども、プライベートなお話をあまり先生方にさせていただいたことはございませんので、簡単に自己紹介からさせていただきたいと

思います。ちょっとプレゼンっぽく、こんな感じのマインドツリーというんですかね、自己紹介ツリーというのをつくらせていただきました。真ん中のほうに私はおまして、そこから右上のほうの仕事ということで、私、2011年、東日本大震災があった年に採用になりまして、そこから広報室、留学生支援室、人文学部、今は入試チームというふうになっております。

左上のほうにあるんですけれども、先ほど紹介もありましたけれども、生まれてすぐにアメリカのほうに、留学でもないですね、父の仕事の関係でついていただけなんですけれども、小学校入学までを過ごしまして、小学校は帰ってきて、中学校の1年生、2年生を再度、父の仕事の影響で行っていたと。どちらもアメリカに住んでいました。高校野球がしくて帰ってきて、そこから三重大学に入って、そのまま三重大学に採用になったという流れになっております。

趣味はいろいろ書いてございますけれども、最近はDIYとか、キャンプとかにはまっております。右下に書いてあるものは全部僕が作ったんです。特に一押しと言いますのは、物置を自分で建てましたので、作り方を教えてくださいという場合はぜひご連絡ください。

性格としてはもう分かると思いますが、こんな場面で皆さんの前でしゃべっている時点で汗が噴き出ておりますので、メンタルが弱いということをご理解いただいて、ただ、目立ちたがりの部分もありまして、インスタとか、結構オーバーリアクションでもありますし、ちょっと矛盾しているところもあるんですけれども、基本、今日も胃薬は2袋飲んできていますので、なかなかあれなんですけれども。基本的には仕事は早く終わらせたくて、残業は嫌いというような性格です。卒業研究の発表以来、こういうパワポを使って説明などしたことがないので、時間の使い方もばらばらかもしれませんが、引き続きよろしくお願ひします。

さて、本題に移りたいと思います。まずは日本から海外のほうに日本人学生を派遣する留学について、ご説明させていただきたいと思います。人文学部については、大きく分けて3つ留学の種類がございます。まずは短期に、数日から数週間となっておりますが、人文学部で言うところのオックスフォードとか、そういった集中講義で行くドイツのフィールドスタディーとか、本学部ではそのようなものが短期留学に当てはまります。

大学が全学で主催するものもありまして、学生自身が短期と思ったら、それは短期留学になります。人文学部主催のものは、ご存じのとおり単位を伴う場合が多いです。全学の場合もたまにあつたりしますが、そこは各募集要項をご覧になっていただければと思いま

す。

その下、私費による長期留学というのがあるんですけども、基本的に学生さんは休学をします。ただし、中には休学をしてしまいますと、在学期間が足りずに確実に留年、5年目に突入してしまいますので、中には4年で卒業することが大事ということで、三重大学にお金を、授業料を払って、なおかつ海外の大学にも払って、長期留学に行く学生もいらっしゃいます。その場合はもちろんそういった指導をといますか、学生さんの話を聞いて、事情を聞いて、進めていっていただければと思います。ただし、私費による長期留学の場合は、単位互換、持ち帰った単位は三重大学の単位に互換できませんので、そのあたりはきちんと指導していただければと思います。

一方、その下、協定校への交換留学、半年から1年となっているんですけども、三重大学に授業料を払うことで、協定校には授業料を払わなくて済みますので、休学をせずに留学が可能になります。もちろんこちらは海外で取得した単位は本学に持ち帰ってきて互換することが可能です。

それぞれの留学における指導教員の役割について、ご説明させていただきたいと思います。短期留学の場合ですと、指導教員としてはさほど役割等はございません。しいて言うとしたら、海外渡航届を必ず出すようにご指導いただければと思います。海外渡航届には先生の確認の印鑑が必要ですので、学生さんから依頼があった際は、必ず確認をして印鑑を押してあげてください。

ここで早速1つ、個人的な意見を言わせていただくと、海外渡航届の紙媒体の提出、これがどうしても煩わしいと言いますか、本当はなくしたいところではあるんですけども、いろいろ国際交流チームの方のお話とかを聞かせていただくと、やはり指導教員の印鑑、あれでちゃんと指導教員が確認しているというところがどうしても電子化できない部分であって、もしそこが解決できるのであれば、そういったシステムが組めるのであれば、電子化というのも可能じゃないかなと思います。もし何かいいアイデアが浮かびましたら、学務でもいいですし、国際交流チームへ直接でもいいので、ちょっと連絡して、こんなことをやってみてはどうでしょうかと伝えていただければ、紙媒体もいづれなくなるんじゃないかなと思います。

休学を伴う場合の留学の場合、卒業が遅れることになりますので、卒業までのスケジュールについて、きちんと学生さんと指導と言いますか、相談して、特に法律経済学科の場合には3年次にゼミ演習がございますので、3年次の後期から留学、なおかつ1年間とか



となりますと、演習の科目が3年次と4年次で取れないことになってしまいます。なので、そこら辺、半年に留学をしてあげれば、4年次に演習を取ることが可能でございますし、5年次というか、留年をしてという相談も乗ってあげられると思いますが、今のカリキュラム上、法律経済学科の場合は、通年、前期と後期の演習ということになっておりますので、そこら辺、注意してご指導いただければと思います。

協定校への留学の場合は、これらに、今説明をさせていただいた渡航届と就学相談以外に、単位互換の案を作成していただく場合があります。希望者だけなんですけれども、希望が出た場合は指導教員に対応いただきます。作成方法は次のスライドでご説明させていただきますが、実際、単位互換を出してくるのはちょっと最近ちらほらいたんですけれども、少ないかなというのが事務としての私の印象ですね。なかなか互換をしてくださいという人は少ないかなと思います。

単位互換についてご説明させていただきます。一応学則上の上限は30単位となっているんですけれども、私が人文学部に来て何となくですけど、平均して6とか8とかぐらいを互換している方が多いかなという印象です。互換には条件がありまして、もちろんのことなんですけれども、授業の内容がおおむね一致していないといけません。授業の内容が一致しているかどうかの確認をするためには、学生には必ず向こうの大学のシラバスを提出するように言うておりますので、指導教員の先生方はそのシラバスとこちらのシラバスを確認いただいて、互換の案を作成してください。時間数と単位数にも制限がありまして、こちらの科目の単位数および時間数は海外の大学の科目のそれを下回ってはいけませんというふうに書いてあるんですけれども、つまり、単位数や時間数が少ないものから多いものに互換することはできませんということなので、ご注意ください。ただし、海外の大学の2科目、複数科目をこちらの科目1科目に複合して読み替えることは可能ですし、逆に向こうでかなり時間数を使って、単位数もかなりあるものを分割してということも可能ですので、そちらはまた詳しいことは学務担当にでも聞いていただければと思います。

実際の教務委員会の資料としましては、こんなやつを見たことがあるかと思いますが、教務委員会に上がってくる資料です。ちょっと細かくて申し訳ないんですけれども、一応右上に書いてある注意事項が、三重大学では90分×15回の1350分で2単位、語学系の場合は1単位となっておりますので、必ずこれを下回らない、だから、1350分で2単位あげられるような読み替え案をつくってください。

ちょっと話がそれるかもしれませんが、留学の際の保険についてちょっとご説明させていただきたいと思います。もし海外渡航届が学生さんから出てきましたら、必ず学生が保険に入っているかどうか、確認していただければと思います。入学時に学研災、学研賠というのを、強制ではないんですけれども、強く勧めているんですけれども、中には生協さんのに入ったりもするんですけれども、海外留学の場合、この学研災、学研賠というのはもちろん適用外になりますので、ただ、三重大学はこの学研災、学研賠に加入しておりますので、通常だと海外旅行保険ですと、民間のものをを使うと、14から20万ぐらいかかってくるんですけれども、1年間の留学とかになりますと。ただ通常、学研災付帯海外留学保険、通称付帯海学ですと、8から10万程度で民間の海外旅行保険と同じ程度の補償をカバーすることができますので、もし入っていないということでしたら、こちらの保険も勧めてみるといいかもしれません。

付帯海学、その保険の補償内容としては、こんなものが挙げられます。ほとんど見ていただくと分かるように、事故・病気だけでなく、損害賠償のほう、けがを負わせたときとか、自分のものがスリに遭った等もカバーしておりますので、民間の海外旅行保険と変わらないかと思います。

学生自身の保険のことですので、指導教員にあまり関係ないと思われるかもしれませんが、ちょっとこちらの事例をご覧ください。読み上げますね。1番、メキシコにおいて、駅にて持っていたリュックをひったくられて、デジカメ、電子辞書が被害に遭った。犯人を追いかけたが、人混みのため見失ってしまった。結局、戻ってこなかった9万円の損害ですと。2番が、香港で寮の部屋のスプリンクラーを壊し、寮の中を水浸しにさせてしまった。80万円の損害。ドイツで発熱、腹痛の症状を訴え、受診。憩室炎と診断され、17日間の入院・手術、家族が駆けつける、看護師が付き添い、医療搬送、治療費・医療費で540万。イギリス、体調不良を訴え、倒れ、救急車で搬送、くも膜下血腫と診断され、32日間入院・手術、家族が駆けつける、医師・看護師が付き添い、医療搬送。治療費・医療費で1242万円。これと同様の事件・事故が起こった際に、保険に入っていないと、これだけの金額を自分の指導している学生が払うことになってくるので、とても学業どころではなくなってくるので、保険に関してもしっかりとアドバイスをお願いしたいと思います。

では、お待ちかねと言いますか、ここからは留学生の受け入れについてご説明させていただきたいと思います。まずは留学生の身分についてご説明します。そもそも留学生というふうに言っているんですけれども、外国籍を持っている方イコール留学生というふうには

本学では定めておりませんので、留学生というのは、日本にいるための外国籍を持っている方には必ず在留資格がありまして、その中でも留学というものを持っている学生のことを本学では留学生と呼んでおります。外国籍を持っている学生でも、在留資格が例えば永住者、家族滞在というような在留資格の場合は、単なるというのも失礼ですが、外国人学生というふうになりまして、日本人学生と同じような扱いになります。ですので、留学生対象の寮とか、奨学金に申し込むことができないので、外国人学生がもし留学生の寮とか、奨学金を欲しいという場合は、留学の在留資格に切り替えてから申請ということになります。

留学生の身分は大きく分けまして2つございます。正規生と非正規生に分かれます。正規生は基本的に入学試験を受けて合格した者が正規生となりまして、非正規生の場合は特に試験がなく、本学部の教育委員会であったり、国際交流委員会で受け入れが審議されます。つまり試験はないです。

正規生の説明は日本人学生と同じ入り方ですので、入った後も一緒ですので、ここでは省略させていただきますので、非正規生について説明させていただきます。

まずは科目等履修生についてです。科目等履修生の制度は留学生だけでなく、日本人学生でも申し込みが可能ですが、指導教員が付きません。人文学部では半期で6科目までというふうに制限が決まっておりますが、留学生が日本で在留するには入管法で10時間以上の聴講が必要というふうに定められておりますので、6科目の場合ですと、90分×6で9時間となって足りないことになってしまいます。なので、人文学部では科目等履修生で在留資格を得るためには、6科目のうち1つは週2回の授業、週に2回ある場合ならば、180分がプラスされますので、10.5時間となりまして、入管法の問題はクリアされます。ただし、この科目等履修生については入学に際してハードルが一番低くて、申し込めば誰でも入学ができちゃいますので、本当にその科目を希望して、科目等履修生になりたくて三重大学に入っているのかというところは見極める必要があるかなと思います。単に日本にいたい、アルバイトをしたいという理由だけで申請しているようであれば、審議の上、受け入れ不可というふうにしなければならないところかなと思います。

次が2番目の特別聴講学生についてです。特別聴講学生とは、三重大学と協定を結んでいる海外の大学から半年、あるいは1年間留学に来る交換留学生の身分の人となります。これとは別に、特別研究学生というのがあるんですけども、それは後ほど出てきます。この特別聴講学生は主に本学の科目を聴講、聞くことが目的で、学期末にはほかの学生と

一緒に試験も受けてもらって、成績も単位も付与されます。渡日後学生が履修スケジュールを、もし特別聴講学生を指導することになりましたら、履修スケジュールと言いますか、この授業を受けたいですというのを持って、先生のところに印鑑をもらいに行きますので、指導学生の日本語能力等を考慮して、1週間取り過ぎていないかとか、あまり無理しすぎていないかなというのを確認の上、印鑑を押してあげてください。

この特別聴講学生についても、先ほどの科目等履修生と一緒に聴講という形になりますので、週10時間以上の聴講が必要になります。なので、週7コマ以上になるように履修指導してあげてください。これは国際交流センターで実施されている日本語の授業も含めていただいて大丈夫です。

特別聴講学生についてなんですけれども、実は人文学部では出願書類の1つとしてこんな書類を出してもらっています。この調書の3番なんですけれども、ここに実は「人文学部では、日本語能力のレベルアップを主目的として留学する場合は、少なくとも学部からの事務連絡を理解できる日本語能力N4レベルが必要です。必要な日本語レベルがない場合は受け入れを断る場合があります」と書かれているんですけれども、事実上は協定校からの希望ということで、正直N4レベルがなくても、極力受け入れていただくというようなことになっております。過去には出願書類の志望理由の欄に、A41枚書かないといけないところを1、2行で、日本でちょっと旅行に行きたいとかしか書いていないという理由で受け入れ不可というふうになった学生も中にはいました。そういった学生も出てきましたので、そうならないように、志望理由はきちんと書くようにと国際交流チームから協定校のほうに連絡しております。ですので今はそういったやる気の見られない出願書類というのは出てこないと思うんですけれども、一応、人文学部としてはN4程度がないと受け入れを断るというふうには出願者には伝えております。なので、もしN4レベルがない場合、受け入れが断られた場合は、こういうことなんだろうなというふうに理解していただけたらと思います。

こちらのグラフなんですけれども、人文学部における交換留学生の受け入れの推移表になっております。グラフをぱっと見て分かる通り、この10年で交換留学生の人文学部における受け入れはだいぶ増えております。何でかという、21年あたりから協定校との締結がぐんぐん増えてきて、当然と言えば当然なんですけれども、本学部としては指導教員の数は決まっておりますので、留学生が増えてきてしまいますと、指導教員の負担も増えるというのも事実です。僕が最後出ていくときなんですけれども、感じたのが、最近で

は1人の先生に5、6人とか、10人ぐらい指導教員を引き受けてくださっている先生もいらっしゃるだったので、めちゃめちゃありがたいことなんですけれども、1人の先生にそれほど指導学生が付いてしまうと、履修指導のことも大変というのがありますし、個人的な意見としましては、多くの先生に1人ないし2人とか見ていただけたら、負担も分散できるんじゃないかと思います。例年6月とか10月ごろに国際交流委員会のほうからお引き受けの依頼があるかと思うので、入試チームの私から言うのも変ですけれども、何とぞよろしくお願いしますというふうに思います。

指導の内容としましては、特別聴講学生の場合はさほど多くなくて、渡日後に面談をしていただいて、履修スケジュールの確認をしていただいたら、留学生はほとんどその授業に出ていだけということになりますので、卒業論文の指導とかというのは特に必要ございません。

特別聴講学生には学部の特別聴講学生と大学院の特別聴講学生、2種類ございまして、学部の特別聴講学生は人文学部の授業しか受けられなくて、成績と単位も学部の授業しか出せません。大学院の身分の特別聴講学生は大学院の授業しか単位と成績は出せませんので、学部の授業を受けたいというふうに言ったとしても、聞くだけという形になってしまいます。もちろんそれは授業を担当する先生の許可も必要となってまいります。

その次なんですけれども、特別研究学生。これは交換留学生のもう1つの身分でございまして、それがこの特別研究学生です。特別研究学生とは指導教員の下で研究活動を行う身分でございまして、留学生自身で研究を進めていく留学生もいるんですけれども、基本的に論文指導を含む研究指導をする必要があります。ですので、先ほどの特別聴講学生よりちょっと受け入れのハードルが高くて、本人の希望する研究テーマを指導できる教員でないと駄目です。なので、志望理由書に本当に全く三重大で指導できるような先生がない場合は、受け入れを断っても致し方ないかなと私は思っております。

この特別研究学生は授業にもし出たい、自分の研究の参考になるからと言って、授業を希望した場合でも、履修は絶対にできません。聴講、先ほど言ったように聞くだけというのは可能なので、授業の担当の先生に聞いていただいて、OKが出れば聞いていただく分にはいいんですけれども、単位や成績は出ないので、ご注意ください。この特別研究学生というのは大学院の身分だけです。学部の特別研究学生というのはありませんので、ご理解いただければと思います。

今ご説明した特別聴講学生と特別研究学生はいずれも交換留学生となりますので、留学

終了後はいったん帰国します。そこからもし本学が気に入ってということであれば、大学院を受けたりとかという可能性はありますけれども、基本的に一度帰ります。

最後に4つ目で挙げさせていただいたのが、こちらの研究生の身分でございます。基本的にこの研究生というのは、大学院進学というのを目的としておりまして、大学院入試合格のための勉強をする身分と、ほぼイコールです。先ほどの特別研究学生との違いは、協定校出身でないというところが一番大きなところでございまして、資格さえ満たせば、どなたでも出願が可能です。筆記試験も面接もありませんので、大学院に進学する意思や能力がちゃんとあるかどうか、出願書類だけで判断する必要があります。

こちらは海外出願、海外在住の出願と国内在住の出願、合わせて年に4回ありますので、この年に4回については、教務委員会のほうから受け入れの打診があると思います。なので、出願書類に研究テーマが書いてあったら、教務委員会が研究内容から判断して、該当する先生のところに受け入れの打診がありますので、もし希望する研究内容を見て指導できるということであれば、受け入れていただくのもいいですし、もちろんちょっと負担がとか、今はゼミでいっぱいということでお断りすることももちろん可能です。

先ほど言ったように協定校出身者ではないので、身元の保証がないと言いますか、ちょっと慎重になる必要はあるんですけども、個人的にはこの研究生は大学院進学を目的としておりますので、今、人文社会科学研究科で問題になっている定員割れを解消する近道であるんじゃないかなというふうには思っております。

そんな中、ちょっとびっくりなニュースが今年の6月ぐらいいにあったんですけども、東京福祉大学系列の名古屋にある専門学校で定員の4倍を超える留学生を受け入れていて、1600人もの留学生の所在が把握できていないという記事なんです。もう1個の記事もあるんですけども。その所在不明のほとんどの留学生が、今説明した身分と同じ研究生であって、この学校さんについては、留学生から学費を吸い上げる目的で金儲けをしていたというのは明らかということですね。うちではきちんと出願時に教務委員会のほうで適切な先生に受け入れを打診してもらって、その先生も受け入れを検討してもらって選考していますし、入学した後については、月に1回、国際交流チームのほうで在籍確認というのも行っておりますので、所在不明者が多数出るということはもちろんありません。ちょっとびっくりなニュースということで、紹介させていただきました。

ちょっとここで休憩と言いますか、ワンプレーク入れたいと思います。皆さん、ビザ、在留資格についてとなっているんですけども、このやり取りをアニメーションで見たい

ただければと思います。とある日の一場面なんですけれども、留学生が「困った、困った」となっています。そこに日本人学生が来て、「どうしたの」と。「ビザがあと2カ月で切れます」「ビザを更新すればいいじゃない。手伝おうか」「本当ですか。ぜひお願いします」というやり取りがあるんですけれども、実は厳密にはこのやり取りはちょっと間違っておりまして、というのもビザというものは、国外の大使館、あるいは領事館で発行される日本に入ってくる際の許可証みたいなものでして、そのビザというのは日本に入ってきたときには、その効力がなくなるものなんです。その代わりに得られるものが先ほど冒頭にも説明させていただきました在留資格というものでして、先ほどの会話で正しいやり取りは、ビザが切れるということではなくて、在留資格の有効期限が切れるというのが正しい会話の中身となります。ただ、会話する上で、今のような在留資格の有効期限が切れるという言い回しは大変分かりづらくて、ビザが切れるでも十分通じますので、今のままビザが切れるというような使い方をされていまして、このまま気にせずお使いいただいても問題ないかと思います。

ここから、こんなときどうするというところで、僕が留学生支援室時代によく先生からいただいた質問について、ちょっとピックアップしてご紹介させていただこうと思います。

まず最初が、自分が指導する学生にアパートの保証人になってほしいというふうに頼まれたんですけれども、保証人になるべきでしょうかというふうになったんですけれども、この答えとしましては、保証人になる必要はないです。特にアパートの保証人につきましては、三重大学では留学生住宅総合補償制度というのに加盟しておりますので、留学生本人が年間4000円のお金を払っていただければ、国際交流センター長名を使って、大学が保証人になることが可能です。ですので、アパートの保証人を探していますという相談をもし指導教員のほうにされましたら、それは国際交流チームのほうに行って相談してくださいというふうに言うだけで大丈夫です。

ただ、この制度はあくまでもアパートの保証人になることですので、ほかの契約については保証することはできません。例えば日本の場合は、未成年が携帯を大手3社で契約しようとする、どうやら保証人が必要というふうに言われちゃうらしいんです。なので、1年次特別入試とかで留学生が入ってくるのが18、19歳、そういう子が日本に来てすぐに携帯を契約しようとしたけど、保証人が必要、指導教員に相談ということになった場合、それは保証人になる必要があると言われると、保証人になる必要はないです。はっきり言いますと、そこまでの責任が指導教員にはありませんので、お断りしていただいても大

丈夫です。解決法としましては、大手3社をあきらめていただいて、ほかにも格安SIMとか、本学が導入している寮のインターネット会社とかにも格安SIMがありますので、そこは保証人が要らないというふうに聞いておりますので、そういったのをご紹介いただければと思います。

次の質問に移りたいと思います。自分の下で研究生になりたいという問い合わせがありました。話を聞くべきでしょうか。これもなかなか多い質問でして、この質問に関しては、人文学部に来てからもよく先生のほうからいただきました。答えとしましては、本学部において研究生は教員の事前の内諾を必要としません。なので、研究生の出願時期に書類をそろえて出願するようにお伝えくださいと。なので、返事をするのがもしお断りしにくいとか、返事するのもあれかなという場合は、学務担当に振っていただきましたら、学部のほうからテンプレですけれども、内諾制度がないので、出願書類をそろえて、この時期、いついつまでに出してくださいというようなメールをお送りさせていただくことができます。

このFDが始まる前にいろいろ先生としゃべっていたんですけども、そもそも内諾制度を入れてみてはどうか、逆に内諾制度を入れることで、その場でお断りできるんじゃないかという意見もあったんですけども、そこら辺は今後の人文学部の方針として、他学部は全部内諾制度を取り入れていますので、人文学部として内諾制度も入れていこうということであれば、内諾は出せないというふうに断ってもらえばいいかなとも思います。

中には履歴書や研究計画書を送ってきて、その中身を見て、かなり優秀と思われる学生さんもいらっしゃいますので、その場合は優秀な学生が大学院進学につながるというふうな可能性ももちろんありますので、そういった対応でももちろん大丈夫です。

次の質問が、指導学生と何度も連絡を取ろうとしているのに全く連絡が取れません、どうしたらいいですかということで、こちらもたまにあったんですけども、答えとしましては、国際交流チームでは、月に一度、先ほど言ったように在籍確認というのを行っておりますので、月に1回は必ず国際交流チームの人が顔を見えています。どうしても今すぐに連絡が取りたいという場合は、ほとんどの学生さんは寮に住んでおりますので、寮のほうに直接行くなり、寮に住んでいるチューター等を利用して確認を取ることも可能ですので、国際交流チームまでご相談いただければと思います。

留学生については、実は学籍番号メールというのはあまり使っている人が多くなくて、個人アドレスでメールをしている場合が多いので、学籍番号メールに送ったけどという場



合はなかなか返ってこないことが多いので、最初の面談のときとか、個人アドレスのほうを聞いておけばいいかなと思います。

その次の質問が、留学生が渡日後、挨拶の際に手土産を持ってきてくれた、受け取っても問題ないだろうかという質問なんですけれども、もちろん答えにつきましては、全く問題ありませんということです。お気持ちの品ですので、遠慮なく受け取っていただいて問題ないです。もちろんのことなんですけれども、お土産がないからといって、指導の対応を変えるというようなことはしないでいただければと思います。(笑)「あなた、ないやないか」というのはやめていただければと思います。

実は私も担当していたころはよく事務で担当していた者にお土産をもらいまして、一番印象に残っているお土産は、こちらの紫色の全面クジャク柄のスカーフでして、渡日までずっとメールでいろいろ本当にやり取りさせていただいていたんですけれども、自分のことをずっと女性だと思っていたらしくて、渡されたときも、あれっ？みたいな、持ってきたのというような顔をしていたんですけれども、一応くださったので、そのまま受け取りました。このスカーフについては、今も大切にクローゼットの奥のほうにしまっております。

なので、皆さまも事前に学生さんと、海外にまだいるときにやり取りされる場合は、自分のメールの本文に、MrとかMissとか付けておくと、こういったお土産に関しては勘違いがないかなと思います。

その次の質問は、結構この質問は、まず読み上げさせていただきますと、指導学生がムスリムの学生なのだが、注意することはあるだろうかということなんですけれども、結構理系の先生から質問が多かったんですけれども、今後、もしかしたら人文学部のほうにもこういったムスリムの学生さんがあるかもしれませんので、ちょっとご紹介させていただきたいと思います。答えとしましては、気にしすぎることはないです。本当に普通に接していただければいいんですけれども、書いてあるとおり、考え方や文化というのは尊重してあげて、日に5回礼拝を行うことが彼らにとっては普通、例えば夏とか、断食の時期とかもありますので、そういったことも先生と学生とで前もってよく相談していただいて、研究活動で、書いてあるとおり、終日拘束して、礼拝をする時間も与えないというようなことがないようにお願いいたします。これを怠りますと、特定の宗教を信仰する人に対する言語、心理、身体的なハラスメントであるレリジヤスハラスメントに当たるそうなので、ご注意ください。

スライドはここまでとなっているかと思いますが、これ以降は事前にお問い合わせいただいた内容で、私が見る範囲でお答えさせていただきたいと思います。いただいた質問の中には、先ほどの説明でお答えできたかなと思われる質問もあったかと思いますが、その質問に関しては今回省略させていただきたいと思います。

まず、留学生が資格を得る際の日本語能力の基準はどうなっているのか。日本語能力試験1級を取得している者もいれば、日常会話もままならない者もいて、留学生の身分や出身によってどのように異なるかが不明ということなんですけれども、恐らくこれは交換留学生のことかなというふうに思っております。正規生なら日本語ができないと、そもそも学部のほうに合格できませんので、これに関して結論からいうと、一応すべての留学生において、大学で日本語を使用言語として教育を受ける場合、目安なんですけれども、日本語能力N2レベルは必要というふうに入国管理局のホームページにも書いてあります。ただし、これはあくまで参考というか、目安でございまして、在留資格申請時にも日本語能力試験の証明書を出せというふうには言われておりませんので、必須書類とはなっていません。なので、フィルターをかけるのは入国管理局のほうでフィルターをかけるのではなくて、大学のほうでフィルターをかける必要がありますので、あまりにも日本語ができないのということでありましたら、受け入れの時点でお断りをするしかないです。そういった対応を取る必要があります。

次、こちらの質問、履修登録の遅れによる出席日数のばらつきをどう対応すべきか。日本人学生と比べ、通常留学生は2、3週間履修登録が遅れることが多い。出席日数も評価に影響することがあり、どう対応したらいいのか悩むということなんですけれども、まずこれについては、何で履修登録が遅れるかというのをちょっとご説明させていただきたいと思います。実は交換留学生の履修登録は、システムの事情でユニパで学生が自分で入れるという方法を取ってなくて、紙媒体で出してきたものを学務の職員が履修者名簿の作成をするという日程の関係上、修正申告の最終日を締め切りしております。なので、授業が始まって2週間後を締め切りとしておりますので、おのずと登録が2週間以上遅れるということになっております。なので、もし早めに交換留学生のほうで、1週間目からきちんと希望を出してきたのにもかかわらず、実際名簿に上がってくるのは3週目以降になってしまいますので、それまでについてはお名前を先に控えておくとかしていただいて、ご対応いただければと思います。

出席日数、実際は1週目からは出ているとは思いますが、履修者名簿のほうに

お名前が上がっていないということで、2、3週間遅れているというふうに私は推測しているんですけども、実際渡日が遅れてくる学生さんはいるとは思います。それはビザの都合上とかもあるかもしれませんが、そういった出席日数が評価に影響するというのであれば、それ相応の評価をしていただいても僕はいいかなと思います。

交換留学生をどこまで受け入れる必要性が高いのか。いずれも断ってもいいのか。それでは大学ないしどこかが困るのかという、なかなか入試チームにいる私がお答えするのは難しい質問なんですけれども、もしかしたら私より国際交流委員会のほうからお答えしてもらったほうがいいかなとも思うんですけども、個人的な意見としましては、協定校ということで、しかも本人は日本に来たいという意思があるので、ぜひとも受け入れてあげたいなという、留学生サイドに立った目線としては思うんですけども、おっしゃるように、全く日本語ができないとか、遊びに来ているとかっていう人も中にも見られるので、人文学部の専門の授業を理解できないとか、やる気がないということであれば、受け入れを断って、あるいは日本語のレベルが足りないと思われるんだったら、国際交流センターのほうに流すというか、人文学部では受け入れが無理というふうに言うだけであれば、もしかしたら別の学部で、というふうなことにもなるかなと思います。

かなり読みにくいんですけども、留学生の多くは日本文化に興味がある。そして日本地域の教員に受け入れを求めるが、実際には語学習得が目的である場合が大半である。このような留学生には、母国に近い地域の教員の方が受け入れ教員として適当ではないのか。また、言語能力の限界から、専門科目を履修するのはほぼ不可能であるのに、受講して、もっとやさしく説明せよなどといったクレームがつくことがある。一般の日本人学生の教育に支障を来す恐れがある、ということなんですけれども、本当に今から個人的な意見を言いますが、何を言っているんだと思われる方もいるかもしれないですけども、個人的には私は特別聴講学生については、極端な話、ランダムで割り振ってもらってもいいかなとも思っているんですね。実際授業を聞くのは自分で授業を聞きますし、卒業論文の指導もないので、僕は1人でも多くの先生方に1人ないし2人を受け入れていただいて、負担を少なくしてもらったほうがいいかなと考える者ですので、極端な話、ランダムで振り分けて、1人ぐらい、2人ぐらい見てもらったらいいいかなとも思っているんですけども、なので、日本文化に興味があるからといって、日本研究の先生が受け入れる必要はないかなというふうに僕は思っております。国際交流委員の先生いらっしゃいますか。ご検討ください。

交換留学生のために授業のレベルを落とす必要があるかという点、これはもちろんないです。中には自分の力試しというか、どれぐらい授業が理解できるかなというお試し感覚で取る学生もいらっしゃいますが、それは理解できなければそこまでという話になりますので、留学生に合わせる必要は全くございません。評価も足りないということであれば、5以下というか、不合格にしてもらっても問題ないです。

次です。そもそも留学生をこれ以上受け入れることは大学の専門教育にとっていいことなのか、見直しが必要ではないかということで、これはさすがに私の立場では難しいとは言ってしまったんですけども、見直しという点で1つ補足説明をさせていただくと、この4月から交換留学生の受け入れに関して、ちょっと制度が変わりまして、これまで1つの大学から5名、厳密には10学期分の受け入れが可能だったんですけども、この4月から受け入れ可能な学期数に変更はないんですけども、学部の偏りを軽減という意味で、1つの学部に3名までというふうに、この4月からなったというのを国際交流チームに確認しております。なので、1学期に5名全員が人文学部というようなことはなくなったそうです。

次です。留学生受け入れの事前書類にビザ取得のためとして、週当たり10時間以上の指導計画書の作成が求められる。面談もしていない段階の文書であり、全く空虚なものであるだけでなく、実際に1人当たり週10時間の指導をしているのは、とても本業をこなすことは不可能である。国際交流チームは実態に即していないことを承知で依頼してくるが、万一何か事件が発生した際、週に10時間以上指導することを約束しているのではないかと問題にされる可能性があり、精神的に負担であり、これを学部の教員に求めるのをやめていただきたいのご意見なんですけども、その様式というのをご覧いただければと思います。

こちらが特別聴講学生の聴講内容計画書で、この計画書については、おっしゃるとおり、ビザ取得のために必要な書類となっております。以前僕が留学生支援室にいた時代は、この聴講内容計画書についても受け入れ教員に作成していただいたんですけども、先ほどの意見にもあったように、面談も行っていないですし、実際、渡日後に履修する際に大幅に変わるということもあるので、最近ではこちらの様式はあくまで計画ということで、各学部の教員には依頼していなくて、国際交流センター長名で統一されたものを国際交流チームでつくっているそうです。なので、指導教員のお名前はこちらには入っておりません。

先ほどの意見にあって、問題となっておりますのが特別研究学生のほうのビザに必要な書類です。こちらは最後には国際交流センター長名が出ているんですけども、一応その

上の赤い枠で囲ってあるところが指導教員の名前が入るということで、こちらが負担となっているというようなご意見かと思います。

ちょっと1つ、その前にご理解いただきたい点がありまして、週 10 時間以上は負担というふうに書かれていたんですけれども、週 10 時間以上研究を行わないといけないのは留学生のほうで、指導教員が週 10 時間以上マンツーマンで張り付いて指導というわけではないということだけ、ご理解いただければと思います。なので、週 10 時間以上の研究活動を行うように指導していただくというふうに考えていただけるのであれば、ちょっとは気が楽と言いますか、考え方を変えていただけるかなと思います。

意見にもありましたが、面談もしていないのに、計画はできないということ言うのでありましたら、恐らくそれを国際交流チームにそのまま言ったとすれば、であればメールアドレスとか教えますので、メールとかスカイプ等で事前に連絡を取っていただいて、きちんとした計画書を上げてくださいというふうに言われるんじゃないかなと僕は思います。本当にこの書類については、ビザ申請のときにしか使わない書類ということで、国際交流チームとしても、なるべく負担の少ない形で依頼をしているんだと思うんですけれども、その内容に責任が持てないということであれば、学生と事前に連絡を取っていただいて計画するのが一番ベストかなと、お互い納得かなというふうに思います。

僕がいたときも、この前、国際交流チームの職員にも聞いたんですけれども、この計画書に関して、入管から問い合わせをもらったことがあるかと言われると、一度もないそうです。

次の質問です。留学生が研究生として来た場合、チューターが付くのが半年だけであり、大学院に進学後にはチューターは不在である。そのため、論文の日本語指導ではチューターの手を借りることができず、指導教員に多大な負担がかかっている。これを何とか解決できないかという質問なんですけれども、こちらについては、チューター制度を担当していないので、私からどうこう言える立場じゃないんですけれども、一応確認させていただいたら、研究生で半年間チューターを付けた後、大学院に正規生として上がった場合はもう半年付くそうです。僕がいた時代は、研究生の半年で使った場合は、もう大学院に上がったときは使えないってなっていたんですけれども、ちょっと制度が変わったらしくて、身分が変われば、また新たに半年間付けることが可能だそうです。

ただ論文指導をするときには、チューターの適用期間というのはもう既に過ぎておりますので、負担かとは思いますが、論文の日本語指導というのも業務の1つとして

割り切っていただくか、あるいは年度初めに配分されております留学生経費というのを使って、日本語校正サービスという、そういうのがあるんだそうですね、日本語を見ていただくような会社に論文を見てもらうということで、日本語については対応いただければな、というふうには思います。そんなところですかね。

こちらで用意したスライドは以上になります。もし質問等があれば、これからお答えしようかなと思うんですが、お時間に限りがありますので、次に教授会も控えておりますので、打ち切ってもいいように先に拍手だけもらっておきます。(拍手) ご清聴ありがとうございました。

【司会】 どうもありがとうございました。3時を過ぎてしまったんですけども、せっかくのご講演でしたし、皆さまからいろいろ質問とかあると思いますので、ちょっとだけ延ばさせていただきます。

事前にいろいろ質問もいただいております。私も今日のお話を伺って、また事前にパワポを見せていただきまして、それで解決がついたこともありますし、少しほっとしたこともあります。それだけでも私にとっては大変ありがたかったんですけども、制度を変えたほうがいいのか、という問題提起もあろうかと思います。国際交流チームの組織というものをもっと強化しないととても持たないのじゃないかとか、私も感じたことがあるんですけども、そういった議論が必要なことはこの場ではとても無理だと思いますので、事前に質問をいただいた方、あるいは今のお話を伺って、こんなことを聞きたいという質問などがございましたら、ぜひお出しいただければ、と思います。特に事前に質問いただいた方々、これで解決がついたのか、さらになおお聞きしたいことがあれば、ぜひお出しいただければと思います。

【教員A】 ありがとうございました。端的にいくつか今指導している学生で起きている問題についてお尋ねしたいと思います。留学生に関する件は2点です。受け入れている学生がどのような保険を持っているか、これが全く確認できなくて、病気のときにちょっとトラブルがありましたので、これは大学の制度として何か受けているのか、あるいは大学として留学生が来た段階で保険に入っているのかどうか、それが1点です。

もう1点が、私はなくなってしまったんですが、授業料の保証人をさせられてしまいました。これは本学ではなく前任校での話なんですけど、ほかの先生は皆さんやっつけいらっしやいますよという集団の圧力でした。

3つ目が留学した学生なのですが、先ほど単位互換のためシラバスを持ってきてねって言うんですが、協定校でありながら、シラバスの出てきたものについて、時間とか内容が取り切れない。これを何回も向こうのアカデミックセンターに送りつけているんだけど、返ってくるペーパーでは多分読み替えできないだろうと。そういう意味では、大学として協定校とどんなことをやっているのか、あるいはそういう場合、先ほど単位交換を出してくる子はいないよというんだけど、実はあきらめさせていることもありましたので、その辺、すみません、3つなんですけれども、端的にお願いできればと思います。

【郡】 まずは保険なんですけれども、派遣のときの保険は説明させてもらったんですけども、受け入れのときの保険につきましては、一応協定書のひな形の中に、海外において保険に加入した上で送り出すようにというのが協定書の中に盛り込まれておりますので、三重大学としては入っているという前提で受け入れています。ただし、その確認は本学では、国際交流チームでも学部のほうでもしておりませんので、実際そうなった場合というのは本人の責任で、協定校の指導ということになりますので、ちょっとその責任の所在というのは分からないところではあるんですけれども、一応協定書のほうには書いてありますので、何かトラブルになった際は協定校のほうに言っていただければ確認は取れるかなと思います。

保証人については、確かに正規生で入学されるときに、複写式で授業料の保証人というのがあるかと思うんですけれども、あちらについては、遅れてでもいいので、本当に先生がなる必要は実はなかったんですけれども、基本的にはご両親というか、自分の母国にいるご両親になるかと思っておりますので、確かにその日に、出願期間、入学手続きの期間までに出さないといけない書類なんですけれども、あれに関しましては財務のほう、収入のほうに事前に相談をしまして、印鑑がない状態で先に出しておいて、後から海外発送でやり取りした、印鑑がつかれたものを後日送ってきて、提出という形でも問題ないので、留学生本人にそのように説明して、きちんと保証人になってくれるご両親とかに頼んでくださいというふうにお伝えいただければ、そういった責任については負う必要はないのかなというふうには私は思います。

【教員A】 留学先の単位互換で、向こうがシラバスがあまりにも雑であるという…。

【郡】 確かにシラバスがないというところもあるんですけれども、カレンダーで何時間やったとか、この日とこの日とこの日にやったという書類で互換した過去もありますので、そこら辺は教務委員会の判断になるのかなというふうには思うんですけれども、向こうで担

当の教員になった先生に作っていただくとか、そういった向こうの大学として作った書類があれば、こちらとしても互換は可能かなとは思いますが、どうしてもそれも作ってもらえないというのであれば、おっしゃったように、単位互換についてはあきらめていただくというようなことになる。どうしても時間数と単位数というのは、表記がどこかにないと、大学としての記録にもなりますので。

【教員A】 どの大学とは言いませんが、協定校で単位をもらえますと書いてある協定校に半年間行って帰ってきたら、向こうの語学センター扱いだっただけですが、出てきている限りでは、何も出てこなくて、こちら側からセンターにいくら問い合わせても、「これしかないよ」で返ってきた。要は、日本で行くときには単位を取る気満々で行って、帰ってきたら単位を取れなかったよということが起きているという実態があるので、ちょっとこの場で議論するべきではないんですが、もし何かあればと思います。

【司会】 ありがとうございます。協定校の協定について、もう少し慎重にやっていかないと、いろいろ問題が発生するんじゃないかという気がしていますね。この件はここまでで収めてください。

ほかにいかがでしょうか。

【教員B】 ご説明ありがとうございます。事務的なことを教員が実際に知らないということ、教員の間でも共有できていないということがあったので、非常に整理されて分かりやすかったんですけども、実際受け入れられたときの教員の対応とか、困った部分は自分側にあまりフィードバックされることがなくて、今、郡さんに聞くことではなくて、ここでどう問題提起するかという話だと思うんですが、例えば受け入れの学生を、特に交換留学の学部生のほうですね。特別聴講学生のほう、名前が覚えられないんですけども、ランダムに担当していただく場合、確かに各教員の負担は減るんですけども、実はチューターの問題が出てきてしまって、ランダムにするとチューターを付けなければいけないんですけども、チューターを頼める学生に知り合いがないところとか、あるいは学生が全然留学生に興味がないから、やりたくない。そうすると国際交流センターのほうであっせんするというふうになる。すると他学部学生とか、人文の学生でも教員と全く接点がなく、連絡が取れない。その学生の人となりも知らない。実際に、私が頼んだ学生が最初は意欲的だったのが途中でちょっと鬱っぽくなっちゃって、留学生が連絡が取れなくて困っちゃったことがあったりとかして、あまりよく知らない学生にチューターは頼めない、みたいな問題も出てきたりするんですね。



だから、ドイツ人だったら、ドイツ語をやっている学生さんがちょっとドイツにも興味があるから、タンデムで教え合ってみたいなことがしやすいとか。もちろんドイツ語じゃなくてもいいんですよ。だけれども、優先的な学生がいそうなところみたいなのも多少あったりして、難しい問題だなとは思っています。だから、事務的に単純に負担を軽減するわけじゃないというようなところがいろいろあって、そういうのを教員同士で情報交換していないので、今日のお話を基に、学部の中で留学生の実際の受け入れのあり方とか、あと研究生の希望者の内諾制度のこととか、もう一度話し合う機会を設けたほうがいいだろうとは思いました。

【司会】 これは郡さんへの質問じゃなくて…。

【教員B】 質問ではなくて、感想なんです。質問としては、学務のほうで断れる、研究生の内諾。内諾制度を取っていませんから。実はそれで内諾制度を取っていない、イコール、出願したら合格すると思っちゃう子がいるみたいなんですけど、どうしたらいいですか。実際に受けに来られて、検定料も払って、打診に来たんですけども、全然専門と関係ない、明らかに日本で勉強したい、日本に滞在したいというだけの。日本語教育希望の子で、一度断ったことがあるんですけども、できれば受け入れてくださいと言われるんですよ、国際交流センターとかに。審査しているほうから。すごい断るのがストレスだったことがあって、見ず知らずの学生を、なんで私、指導する責任を取らなあかんのというのが、内諾制度を取っていないと来ちゃうんですよ。今、私は4月からの4カ月間で12人ぐらい、希望者からテンプレートの、私の名前を変えただけみたいなメールがばんばん来ているんですけども、全部「近代以前の日本語が分からないと駄目だから、私のところでは無理だと思うよ」と入れたら、二度とメールは来ないんですが、内諾制度はないですよという今の対応で返事をしたときには食い下がられるんです。どんどんどん。じゃあ、どういうテーマでやればいいですか、先生に合わせますみたいな感じで。ちょっとその辺はどうしたらいいと思いますか。

【郡】 内諾については、一応学務から内諾が要らないというか、内諾制度を取っていないのでという説明のメールをお送りする際には、出願したからといって、必ずしも入学できるわけではないですよという注意書きは一応テンプレートとして僕は入れていたので、それを見た学生については、それを覚悟の上で合格したらラッキーというぐらいの感で出しているんだと思うんですけども、もしかしたらそういった内諾制度がないというふうに説明したら、それイコール、じゃあもう出願したらOKなんだと思われる学生さん

がいるかもしれないので、それについては、メールの返事でお答えするか、募集要項とかにさらに詳しく記載することで防げるかなとも思うんですけど。

【司会】 それは学部のほうでこれから話し合うべきではないかと思います。ありがとうございます。

【郡】 いいですか。ごめんなさい、こんな具合で。申し訳ないです。

【教員B】 基本的にはそうするしかないですね。

【郡】 自分からもし回答するということでしたら、これが終わった後に、学務のほうに今後続けていくように、というふうには言いたいなとは思っています。

【司会】 事前にたくさん質問いただいたC先生、一言お願いします。

【教員C】 人文学部で留学生の日本語の授業を 2016 年から担当しておりますCです。事前の質問にお答えいただきありがとうございます。私もよく分からない中で、試行錯誤しながらやっているんですけども、どうしても学生によって日本語の能力の差があるのは致し方ないんだなということもよく分かりましたし、その中でどうやって私たち日本語の授業を、その専門の授業に橋渡しできるように運営していくかというのをあらためて考えなければいけないなと思いました。

なかなか私、会議に日ごろ参加しておりませんで、特任で採用されておりますもので、ほかの先生方のご意見を伺う場がありませんもので、また留学生のことで、日本語能力においてこういう面をもうちょっと日本語の授業で強化してほしいとか、そういったご意見等ございましたら、ぜひ直接メールでもいただきましたら、今後の授業の参考にしたいと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

【司会】 ありがとうございます。これからC先生のお力をお借りしながら、この問題についていろいろ解決策を考えていきたいと思っております。

最後に、ちょっと突然で申し訳ありませんが、国際交流委員会として、D先生、最後に締めていただけませんか。

【教員D】 すみません、突然過ぎてびっくりなんですけれども、直前にメールを差上げたから指名があったんだと思うんですが、私はドイツ語ですので、ドイツから来た学生は基本的に私かE先生が受け入れていまして、その中で特にこの先生に学びたいとか、特別これが学びたいと、非常に明確なものがアプライに書いてある場合は無視するわけにもいかないもので、該当の先生にお声を掛けることもあるというような形でさせてもらっています。ドイツ語に関して言うならば、さっきからありましたように、タンデムで、例えば

ドイツ語学習者の学生とタンデムを組んでもらってやったり、クリスマス会を一緒にやったり、割とうまく機能しているかなという部分があるんですけども、必ずしもそういう場合だけではないのかなというのもありまして、C先生が日本語の、日本文化の人文学部で提供している授業に関しては非常にご尽力していただいていると思うんですけども、前に前任のF先生がされていたような留学生全体の受け入れであるとか、留学交流事業の実際の担い手であるとか、そういったことを担当する部門というものが今抜け落ちている気がして、もしも可能ならば、そういった部門を専門に担うスタッフを何らかの形で配置するなり、もしくはC先生の現在の枠をちょっと広げるとか、そういった可能性というのもあるのかなというふうに個人的には思いました。いきなり、さまざまな先生方にいろいろな負担だというふうなだけで、留学生の受け入れが受け止められてしまうのは、あまりにも残念であると思います。以上です。

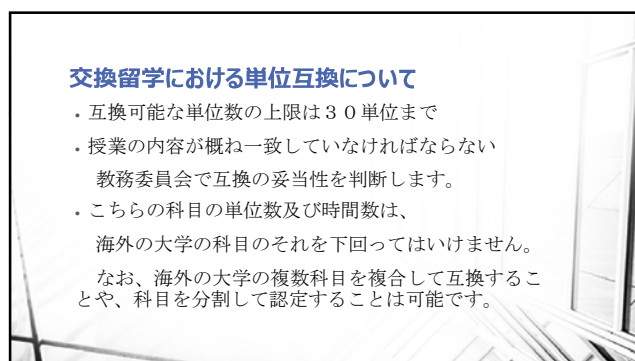
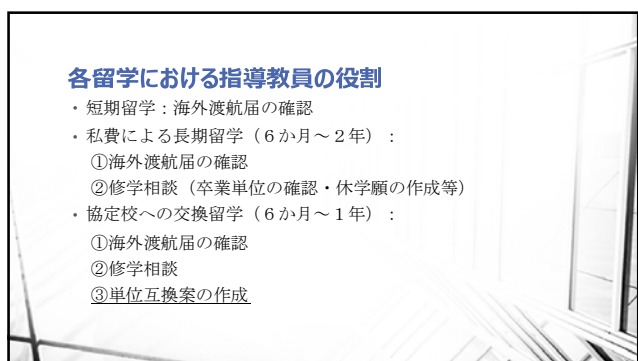
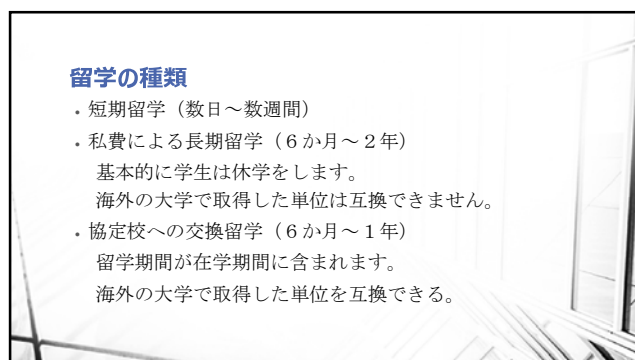
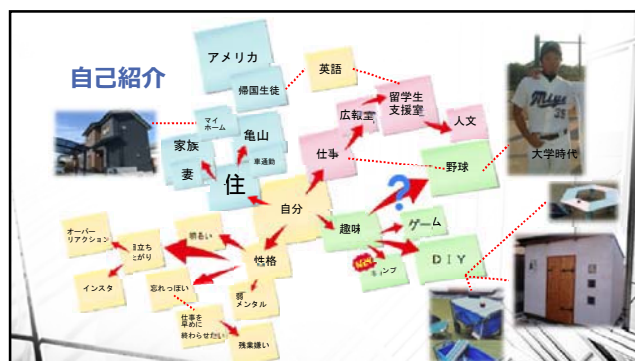
【司会】 ありがとうございます。課題もいろいろと明らかになりましたが、基本的にはこの問題を前向きに考えていきたいと思います。郡さんからいろいろアドバイスをいただきましたが、これから人文学部として考えていくべき課題がより明確になりましたし、いろんな問題が共有できたかと思います。今日は大変有意義な会になったと思います。

郡さんは、講師料はもちろんですが、昼のお弁当も辞退されて、2カ月がかりでパワポ資料を作って下さいました。最後に盛大な拍手をお願いします。

【郡】 ありがとうございます。(拍手)

【司会】 では、これで今月のFD研修会を終えたいと思います。ありがとうございます。(終了)

## 2. 講演会配付資料



学生交流協会の基づく英語留学生の単位認定について (第1)

学年	科目	単位数	認定単位数
1年次	英語 I	2	2
2年次	英語 II	2	2
3年次	英語 III	2	2
4年次	英語 IV	2	2

本学部では  
90分×15回=1350分で2単位  
(語学系は1単位)

複合  
分割  
複合

単位互換には必ず、  
・協定大学が発行する成績証明書  
・授業内容、単位数、時間が記載されたシラバス  
が必要です。

### 海外留学時の保険について

海外留学中に起こった事件・事故に対する補償は、大学入学時に多くの学生が加入する学生教育研究災害傷害保険および学研災付帯賠償責任保険、いわゆる「学研災」・「学研賠」ではカバーできません。

指導学生が海外渡航届の確認依頼に来たら、必ず保険に加入したかどうかご確認ください。なお、民間の海外旅行(留学)保険だと、1年間の留学でおよそ14~20万円程度保険料が必要となりますが、学研災付帯海外留学保険(通称「付帯海学」)だと、8~10万円程度で、ある程度の補償をカバーできます。

### 付帯海学補償内容

学生本人のケガや病気に関する補償

- 海外旅行11日コース**
  - 海外旅行11日コース
  - 海外旅行11日コース
  - 海外旅行11日コース
- 海外旅行21日コース**
  - 海外旅行21日コース
  - 海外旅行21日コース
  - 海外旅行21日コース
- 海外旅行31日コース**
  - 海外旅行31日コース
  - 海外旅行31日コース
  - 海外旅行31日コース
- 海外旅行41日コース**
  - 海外旅行41日コース
  - 海外旅行41日コース
  - 海外旅行41日コース

その他の費用に関する補償

公益財団法人 日本国際教育支援協会主催

### 学生が保険に入らなかった場合・・・

トラブル事例

- (メキシコ) 駅にて持っていたリュックをひったくられる。デジタルカメラ、電子辞書などが被害品。犯人を追いかけたが人ごみのため見失う。約9万円の損害!!
- (香港) 大学寮の部屋の中のスプリンクラーを壊し、部屋内・その他の部屋まで水浸しにさせる。約80万円の損害!!
- (ドイツ) 発熱・腹痛の症状を訴え受診。憩室炎と診断され17日間入院・手術。家族が駆けつける。看護師が付き添い医療搬送。治療費・医療費で540万円!!
- (イギリス) 体調不良を訴え倒れ救急車で搬送。硬膜下血腫と診断され32日間入院・手術。家族が駆けつける。医師・看護師が付き添い医療搬送。治療費・医療費で1,242万円!!

保険なしで払えますか・・・?

### 留学生の受入について

### 留学生の身分

・ 本学における留学生とは、外国籍を有する学生で、在留資格「留学」を有している学生の事を指します。外国籍を有する学生であっても、在留資格「留学」を有していなければ、留学生ではなく、外国人学生という扱いとなります。

・ 留学生の身分は大きく分けて正規生と非正規生に分かれます。

#### 正規生

- 学部生
- 大学院生

どちらも入学試験を経て入学してくる。

※ただし、国費留学生や政府派遣留学生など、試験を受けずに入学してくる場合もある。

#### 非正規生

- 科目等履修生
- 特別聴講学生
- 特別研究学生
- 研究生

交換留学生

特に試験などはなく、国際交流委員会や教務委員会にて受入を検討する。

### 留学生（非正規生）について

<科目等履修生>

本学の科目について、単位数に応じた授業料を支払い、聴講する学生のこと。

<特別聴講学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に本学の科目を聴講することを目的としている学生。履修登録も行うので、単位や成績が付く。

<特別研究学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に指導教員のもとで研究活動を行うことを目的としている学生。研究がメインであるため、履修登録ができない。つまり、単位や成績は付与されない。

<研究生>

主に大学院進学を目的としており、指導教員のもとで研究活動を行います。留学生の場合、特別研究学生と同様、単位や成績は付与されない。

### 留学生（非正規生）について

<科目等履修生>

本学の科目について、単位数に応じた授業料を支払い、聴講する学生のこと。

- ・指導教員は無し
- ・半期に6科目まで（日本人学生も同様）
- ・申し込み先は人文部学務担当
- ・色々ある留学生の身分の中で、入学に際して最もハードルが低く、検定料・入学科・授業料を支払えば入学できる。
- ・ただし、入管法により、聴講生については週10時間以上の聴講を行うことと定められていることから、本学部では7コマ以上（90分×7コマ=10.5時間）履修する必要がある。つまり、6科目中少なくとも1科目については、週2回の科目を含め、7コマ以上としなければならない。

### 留学生（非正規生）について

<科目等履修生>

本学の科目について、単位数に応じた授業料を支払い、聴講する学生のこと。

<特別聴講学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に本学の科目を聴講することを目的としている学生。履修登録も行うので、単位や成績が付く。

<特別研究学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に指導教員のもとで研究活動を行うことを目的としている学生。研究がメインであるため、履修登録ができない。つまり、単位や成績は付与されない。

<研究生>

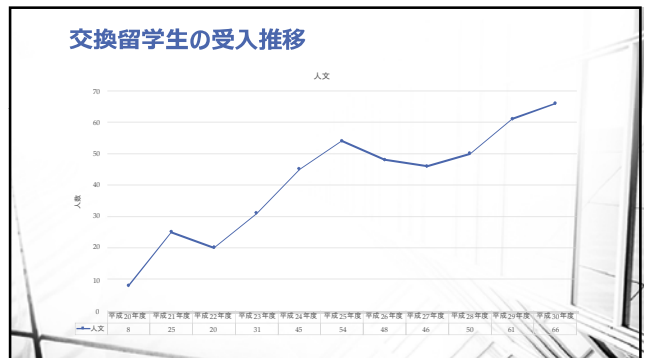
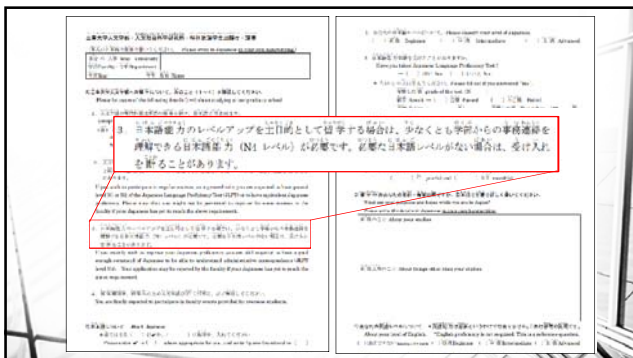
主に大学院進学を目的としており、指導教員のもとで研究活動を行います。留学生の場合、特別研究学生と同様、単位や成績は付与されない。

### 留学生（非正規生）について

<特別聴講学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に本学の科目を聴講することを目的としている学生。履修登録も行うので、単位や成績が付く。

- ・指導教員が必要
- ・国際交流委員会が留学希望者の学習計画等から判断し各教員に受入依頼をかける。
- ・授業科目の聴講がメインであることから、指導教員自ら修学指導を行うケースは少ない。指導学生の日本語能力を見て、本人に無理のない履修スケジュールを組み立ててあげてください。



### 留学生（非正規生）について

<科目等履修生>

本学の科目について、単位数に応じた授業料を支払い、聴講する学生のこと。

<特別聴講学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に本学の科目を聴講することを目的としている学生。履修登録も行うので、単位や成績が付く。

<特別研究学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に指導教員のもとで研究活動を行うことを目的としている学生。研究がメインであるため、履修登録ができない。つまり、単位や成績は付与されない。

<研究生>

主に大学院進学を目的としており、指導教員のもとで研究活動を行います。留学生の場合、特別研究学生と同様、単位や成績は付与されない。

### 留学生（非正規生）について

<特別研究学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に指導教員のもとで研究活動を行うことを目的としている学生。研究がメインであるため、履修登録ができない。つまり、単位や成績は付与されない。

- ・指導教員が必要
- ・国際交流委員会が留学希望者の学習計画等から判断し各教員に受入依頼をかける。
- ・指導教員のもとで研究活動を行うことがメインであるため、希望するテーマについて指導（論文指導も含む）する必要がある分、特別聴講学生の受入よりややハードルが高い。

### 留学生（非正規生）について

<科目等履修生>

本学の科目について、単位数に応じた授業料を支払い、聴講する学生のこと。

<特別聴講学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に本学の科目を聴講することを目的としている学生。履修登録も行うので、単位や成績が付く。

<特別研究学生>

本学（あるいは本学部）と学術交流協定を締結している大学からの交換留学生で、主に指導教員のもとで研究活動を行うことを目的としている学生。研究がメインであるため、履修登録ができない。つまり、単位や成績は付与されない。

<研究生>

主に大学院進学を目的としており、指導教員のもとで研究活動を行います。留学生の場合、特別研究学生と同様、単位や成績は付与されない。

### 留学生（非正規生）について

<研究生>

主に大学院進学を目的としており、指導教員のもとで研究活動を行います。留学生の場合、特別研究学生と同様、単位や成績は付与されない。

- ・指導教員が必要
- ・出願資格を満たせば、協定校以外の出身者でも出願が可能。
- ・教務委員会が留学希望者の学習計画等から判断し各教員に受入依頼をかける。
- ・特別研究学生とは違い、協定校による身元の保証がないため、受入に際して慎重になる必要がある。





### ビザ (査証) ・在留資格について

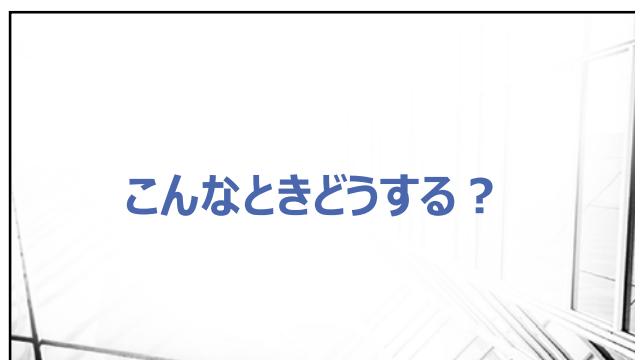
「ビザ (査証)」とは自国以外に入国するときの身分証明書 (の一部)

「在留資格」とは外国人が日本に在留する (= 住む) ための資格

つまり、ビザ (査証) を自国の大使館で発給後、入国時にはその効力を失い、代わりに入国管理局から在留資格が与えられます。

ですので、さきほどの会話での正しいやり取りは「ビザが切れる」ではなく、「在留資格の有効期限が切れる」となります。

しかしながら、会話をするうえで上記のような言い回しは大変わかりづらく なってしまいますし、「ビザが切れる」でも十分に意味は通じますので、気にせずお使いいただいても問題ありません。



**Q.** 指導学生にアパートの保証人になってほしいと頼まれました。

**A.** 保証人になる必要はありません。特に、アパート等の場合、本学では **留学生住宅総合補償制度** を利用することにより、大学が保証人になることが可能です。

**Q.** 自分のもとで研究生になりたいとの問い合わせがありました。話を聞くべきでしょうか。

**A.** 本学部において、研究生は教員の事前の内諾を必要としません。したがって、研究生の出願時期に書類をそろえて出願するようにお伝えください。返事をするのが煩わしい場合は学務担当からお伝えします。



Q. 指導学生と何度も連絡を取ろうとしているのに、全く連絡が取れません。どうしたらいいですか？

A. 国際交流チームにご相談ください。国際交流チームでは月に一度対面にて**在籍確認**を行っておりますので、確認いたします。緊急の場合は、登録された授業、寮やアパートに直接確認に行きます。

Q. 留学生が渡日後、挨拶の際に手土産を持ってきてくれた。受け取っても問題ないだろうか？

A. 全く問題ありません。



Q. 指導学生がムスリムの学生なのだが、注意することはあるだろうか？

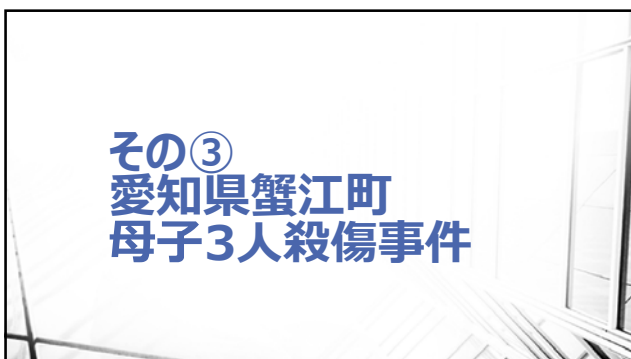
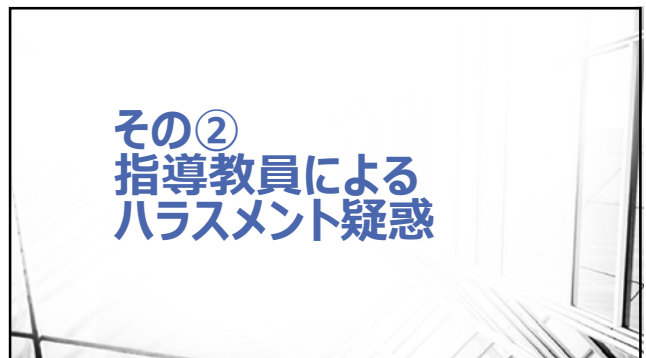
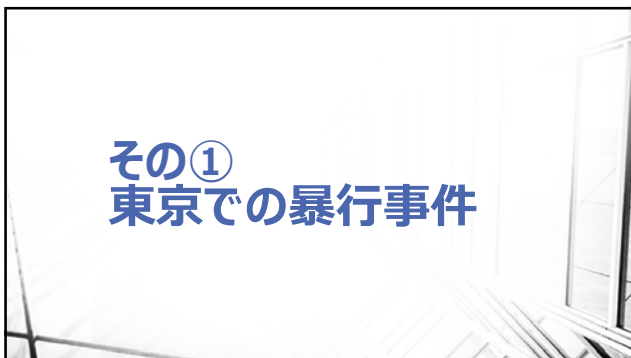
A. あまり気にしすぎることありませんが、ムスリムの方々の文化や考え方は尊重してあげてください。例えば、彼らは日に5回、礼拝を行うことが日常です。学生と前もってよく相談をし、研究活動で終日拘束したりすることの無いようご注意ください。

事前にいただいた  
問い合わせ

Q. 留学生が留学資格を得る際の日本語能力の基準はどうなっているのか。日本語能力試験1級を取得している者も居れば、日常会話もままならない者も居て、留学生の身分や出身によってどのように異なるのが不明。

Q. 履修登録の遅れによる出席日数のばらつきをどう対応すべきか。日本人学生と比べ、通常留学生は2~3週間履修登録が遅れることが多い。出席日数も評価に影響することから、どう対応したら良いのが悩む（他の先生方の対応の仕方も聞きたい）。





### 3. 講演会のアンケート結果

〔注記〕講演会時にアンケートを配付することを失念したため、後刻に参加者にメールにてアンケートファイルを送付して回答をお願いした。回答者数は20名にとどまったものの、総合的な評価は「大変良かった」が15名、「良かった」が5名と極めて高く、またこの種のアンケートでは異例なほど自由回答欄にも多くのメッセージが寄せられた。本学部構成員のFD活動への意欲と受け止めたい。これらのなかには、今後の課題や解決に向けてのアイデアなどが少なからず含まれているため、全てを掲載することとした。これからのFD活動に活かされることを願う。(塚本記)

回答者数：20名（参加者 45名）

【質問1】今回の講演会について、総合的な評価をお聞かせ下さい。

- a) 大変良かった 75%
- b) 良かった 25%
- c) 普通
- d) あまり良くなかった
- e) 良くなかった。

【質問2】今回の講演会の感想、留学生問題についてのご意見など、自由にお考えをお書き下さい。

事前に質問した内容についてお答えいただき、留学生の身分やそれぞれの違いにより教員側に求められていることが明確になりました。しかし、受け入れる留学生の日本語能力の基準に関しては、もう少し精査する必要があるのではないかと思います。

実は、以前に国際交流センターや教育学部の日本語教育の先生方から、「留学生指導教員のためのガイドブック」(H27年7月三重大留学生委員会 p.1)に担当教員として私の名前が掲載されていたためか、「人文学部で留学生が受けられる日本語の授業（特に初中級用）を増やせないものか」などの相談がありました。私の立場では対応できないため、学部長にご相談いたしましたが、専門の授業が受けられない日本語能力の学生がわずかではあるものの人文学部に在籍しており、英語での授業を含めても週7コマの履修が困難であるということでした。

今回講演会でもご説明いただいた留学生の日本語能力に関しては、文部科学省の要件に「N2レベルかそれ相当以上」とありましたが、これはあくまで参考で必須ではなく、本学人文学部では「N4以上」でも留学可能な実態がわかりました。受け入れの際、日本語能力における厳しい審査を設けない以上は、多言語での対応や専門の授業を受けられるサポートの必要性も出てくるのではないかと思います。

私の授業では、履修可能な科目が多くない留学生のために、日本語のレベルにおける条件は設けておりません。そのため、日本人学生との協働の「日本語コミュニケーション」という授業でも、留学生のみの「日本語と日本社会」という授業でも、常に学生同士助け合うグループ学習やペア学習の形態をとっております。それでも、新聞などの読解資料を扱いますので、N2以上でないと授業への参加は苦しくなりますが、学生同士の協働の精神にかなり助けられています。

今後も、人文学部で留学生の受け入れを継続していく場合、受け入れ基準の厳格な審査が困難であるならば、専門の分野においても、日本人学生と留学生との協働学習の形態を授業に取り入れることが対策の一つになるのではないかと考えています。専門の授業の中での協働学習なら、同じ専門分野のチューターが見つからないという問題も解決できると思いますし、日本人学生にとっても良い学びの場となるはずですが、場合によっては負担となることもあります。私の授業の振り返りでは、日本人学生から有意義であった旨のコメントが多く見られましたし、講演会最後、菅先生からのドイツ語のタンDEM授業における興味深いご報告もありました。今後外国人労働者が増加する日本社会を生きる日本人学生にとっても、異文化理解や非母語話者とのコミュニケーションの機会は重要です。昨今、アクティブ・ラーニングが奨励され、様々な形態での授業を試みていらっしゃる先生方も多いかと思いますが、学生の主体性という観点からも、協働学習は有効と思われる。

①自分が担当することになった外国人学生や留学生の「保証人」を引き受ける必要はないということに改めて確認できた点が良かった。

この点について、過去に外国人学生あるいは留学生(1年)の学費免除申請の際に「保証人」を頼まれたことがある。事情がよくわからない学外ではなく、学内の書類であるにもかかわらず、担当窓口からは「日本在住の親族に心当たりがなければ担当教員に依頼せよ」と言われたらしい。当時学務担当の郡氏に確認したところ、この保証人は形式的なものであり、特に具体的な保証内容はないこと、また絶対に引き受けなければならないものではないので断っても良いと教えてもらったが、心細そうな1年生を前に「保証人にはなれません」ということができなかつた。このようなことがあると困るので、せめて学内の書類に関しては、「原則として指導教員もしくは担当教員に保証人を依頼してはいけない」ということを関係諸機関で再注意してもらえたらと思った。人文学部、国際交流センター、学生窓口、全体で可能な限り外国人学生や留学生に対する説明内容の統一を希望したい。

②単位互換と協定校の関係

単位互換を希望する者が少ないという郡氏の説明に対して、希望できない状態になっている可能性を指摘した質問が興味深かった。単位互換ができるとされている協定校のカリキュラムなどをチェックし、留学希望学生の単位互換がスムーズに行われるところまで学部側が責任をもってこそ、留学に送り出せるのではないかと思った。

③その他

留学生を受け入れる人文側の体制が、誰が悪いということはないのだが、不備がある点が明

らかになった。このあたりは担当者を確保するなどする必要があると実感した。

今回の郡氏の講演は、その実態と問題点について十分に理解することができないでいた留学生の基礎的な問題を明らかにするものであり、今後学部として改善する必要がある点を改めて考察する良い機会になったと考える。入試チームに異動した後も報告スライドを作成するなど多大な労力を費やして協力してくださった郡氏に心から感謝します。

今回の講演会では三重大学の留学の現状を理解することができ、多くの知見を得ました。まことにありがとうございます。

実際に各学期3~5名ほどの留学生を担当教員として受け入れておりますが、問題が起こることが少なくなく、受け入れに当たってかなりの負担があります。たとえば、留学生と日本人チューターのマッチング（チューターの人選を含め）や書類作成、さらに留学生が何らかの事件に巻き込まれた場合には、その対応に多くの時間を割いています。もちろん担当を断ることはできると思うのですが、留学生と語学を向上させるために留学生と知り合っ一緒に勉強したい学生との交流を支援すべきであることを考えると簡単に断ることはできません。このようなことを踏まえすと、チューター担当教員の制度が完全にボランティアとなっている状況は少し不平等であるように感じております。

交換留学生（提携校からの特別聴講学生）の受け入れについて、中国人が多いことからどうしても中国学担当教員にたくさん回ってきます。大学院生や進学希望でなければ郡さんの提案のようにすべての教員にバランスよく割り振るのがよいとおもいます。今年は特に、履歴書だけを送りつけてくる研究生志望（進学希望）の中国人からのメールがたくさん届きます。大学・専門学校での専門も情報学や薬学など、一体なにがしたいのかわからない人もいます。留学希望者窓口は国際交流センターに一本化できないのでしょうか。無視すればとおもいつつも気が引けますし、添付ファイルを開くのも勇気がいらいます。

留学生に関して抱えている問題について、学科によっても状況が違うことも、質疑応答の際に初めて知ることもありました。留学生への対応は教員個人での対応が多くなるので、「何をすべきか、何をしないでよいか（何が過剰で無理な要求なのか）」が、事務と教員の間で共有されていないのが問題です。また、留学生支援室の対応が毎年マイナーチェンジすること、教員への連絡が不徹底・不親切なときがあることも、問題の一つです。学部内で、定期的に、問題を出し合っ解決策を考えるべきだと思います。

私自身に長期の留学経験があり、留学先で日本語TAや交換留学の世話をしたりした経験があるので、逆の立場からではあるが、伺った講演会は大半のところ既知の内容だった。ただ、日本の大学側からの報告ということで、自分の経験による知識を確かめられたのは良かった。また、逆に言えば、郡さんのお話になった内容は、的を的確に射ていると感じた。他の聴衆の方々には有益な講演会だったのではないかな。無い物ねだりをすれば、実際の留学生の声（ある

いはより直接的な要望?) が聞ければもっとよかったかもしれない。また、(研究費使用のマニュアルなどのように、全学的な) 留学生対応の簡便なマニュアルなど共有できるものがあれば、教員間や組織間での共通理解もできて、便利かもしれないと感じた。

基本的なことをしっかりと教えていただき、大変有益でした。留学生の種類と、それぞれの種類に対して教員がどのように対応すればよいかに関して、具体的な方法が皆さんにわかり、良かったと思います。今回のFDは大ヒットです。

昨今の留学生の出入りの動向や文科省・本学の受け入れ(送り出し)のポリシーなどといった大局的な内容よりも、今回のような実務・現場のお話の方が、断然、教員のためになると思います。また、トラブルの実例について、他の例も聞きたかった気がします。

これまでのFD講演会は、ともすれば形式的な情報の発信に終わっていたが、今回は教員が抱えている課題に応えた点で非常に有意義な機会であった。担当下さった郡一樹氏に、深く感謝したい。

私は着任した頃に特別聴講学生を1名受け入れたことがある程度で、全体の留学生の区分や単位を取得するのかなど細かな点を詳しく理解していなかったので、今回のご講演でその相違が明確にわかり、今後のためになりました。

また、質疑応答の内容についても、たとえば研究生希望のメールへの対応は、実際に過去に判断に迷い、他の先生方に相談したことがありました。そうした点について、この機会に改めてお話を伺えて安心いたしました。

今まで留学生の区分を知らなかったので、はっきりわかってよかったです。協定校外の研究生申込は返事すらしないで無視するようにしています。協定校からの受入れでいっぱい입니다。チューターの選定を今期から国際交流チームにやってもらうようになって、それはありがたいのですが、4人やってもらって、2人はうまくいかなかったようです。

留学生制度について情報の整理ができた点がよかったです。さらに、留学生担当教員の受入数なども一覧できると、担当していない教員にも問題が共有されるだろう。

留学生の問題について、全体的に知るための良い機会になったと思います。

今日のように、留学生の受け入れについて基本的なノウハウが共有されることで、受け入れ教員の負担感も減るのではないかと思います。受け入れ教員の責任の範囲がもう少し明確になると良いと思います。

留学生が教員に保証人を依頼するケースの対処方法について聞くことができた。大変参考になりました。

堅苦しくない講演で、楽しく拝聴しました。また、留学生問題について理解を深めることができました。

とても勉強になりました。わかりやすかったです。

具体的にどのように対応したらよいかよくわかったので、大変ためになった。

**【質問3】** 今後、FD講演会で取り上げてもらいたいトピックがありましたら、お書きください。

大学院教育、学部教育の再構築における留学生の確保の重要性。

海外の高等教育事情（入試制度も含めて）。

教員による個別対応が多く、教員全体で問題共有できていないように感じる問題として、「編入生の履修指導」があると思います。

例えば、単位互換で読み替えた必修単位のうち、情報科学基礎などパソコンやレポート作成の基礎を学ぶ授業について、編入前の学校の授業内容では三重大学での学習に必要な基礎スキルが足りない状態で、課題作成時に四苦八苦する編入生の事例がありました。編入して日が浅いうちは相談できる同級生もほとんどいなくて、苦労している学生が結構いるのではないかと思います。

学務係に相談したところ、MEIPLサポートデスクという制度で院生がパソコンやレポート作成の相談に乗ってくれる制度があると聞きましたが、多くの先生は知らないと思います。

そういった「編入生に対して、編入時にどのような説明とフォローがされているか、されていないか」という情報共有があると良いと思いました。

インターネットの活用による、PCやスマートフォンを駆使した教育支援システムの先進的な講義事例の紹介、電子機器を用いた学生と教員の双方向の講義。

クリッカーなどは高価なため、学生がスマホを用いて、教員の質問に答えたりすることができ、講義の学びの確認することが即座にできると、講義の質を高めることになると思います。



学生によるインターンシップへの参加とその指導。

大学に来なくなってしまった（連絡がとれない）学生の対応について。またどこまで教員がすべきなのかを改めてききたいです。

「Moodleの活用法」を希望します。WEB上にマニュアルはありますが、基本的な操作方法はもちろん、様々な活用法についても教えていただきたいと思います。実は、今年の春 Moodle サポートに講習会に関して問い合わせたところ、現時点では講習会は予定していないとのことでした。しかしながら、ある程度人数が集まるようなら、講習会を開催することも可能だという回答をいただき（生物資源学部の森尾先生から）、人数を集められないかと思っていました。学内のアクティブ・ラーニングのFDでは、動画を上げる反転授業以外にもグループ活動やレポート提出にも活用できると聞きましたので、ぜひその活用法を伺いたいと思います。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

編入生の指導上の問題と課題（学力、学業と就活の両立の上での困難、孤立、卒論指導等）、生涯教育と社会人学生の受け入れ問題。

アクティブ・ラーニングについて。

トピックではなく人選についてですが、今回と同様に課長クラス以下の職員の方から、学生対応やその他の問題についてお考えをお聞きしたいです。



#### IV. 学部生による 「授業改善のためのアンケート」



## IV. 学部生による「授業改善のためのアンケート」

### 1. アンケートの概要

#### ① 授業評価実施の目的と方法

三重大学では前期、後期の各学期末に全学生を対象とした「授業アンケート」を実施している。これは、「学びの振り返りシート」と「授業改善のためのアンケート」の二部構成となっており、学生にとっては自ら得た学力を確認するデータ、教員にとっては授業改善を行う際の情報源となっており、毎年6月までに入力する「教員活動データベース」においても、当該アンケートの結果に基づいて行ったその年次の授業改善を記入する項目が設定されている。

さらに本学部では、学部として組織的に教育効果を高めることを目指し、定例FD研修会においてこのアンケート結果を活用し、授業改善のための情報共有や議論を行う素材としている。

学生の「授業アンケート」に基づく授業改善にあたっては、基本的に従来の方法を踏襲することで資料の継続性を維持するとともに、学生の自由な意見・感想の表明の機会となるように工夫を行っている。その一例がアンケート入力方法の改善であり、紙媒体によるアンケートは、2017年度からUNIPAを通したWeb入力となり、2018年度からはスマートフォンからの入力も可能となった。その結果、学生は自分が履修した全ての授業科目についてパソコンやスマートフォンからアンケートを行うことが可能となった。スマートフォンによるアンケートを導入した背景には、学生のアンケートへの手間が省けることからアンケート回答率が上昇することへの期待があったが、実際には回答率が大幅に低下した昨年度よりもさらに低下した。したがって、「授業改善のためのアンケート」の最大の課題は、回答率を上げることである。

なお、今回の分析にあたっては、「授業改善のためのアンケート」を主な対象とし、同時に学生自身への情報提供である「学びの振り返りシート」の「あなたの学びに関する項目」も参考として用いた。

#### ② 質問項目

「学びの振り返りシート」は、I.「管理項目」、II.「あなたの学びに関する項目」、III.「4つの力に関する項目①」、IV.「4つの力に関する項目②」からなり、「授業改善のためのアンケート」は、V.「教育改善の項目」、VI.「学部付加項目 / 教員付加項目」、VII.「授業改善に関する記述欄」からなる。このうち、V.「授業改善の項目」は、学生の視点から授業をよりよくするための改善項目を項目リストから選択することになっている。VI.「学部付加項目 / 教員付加項目」は、それぞれ各学部・各教員単位で設問を追加することが可能なカテゴリであるが、本年度は学部としての付加項目は特に設定しなかった。VII.「授業改善に関する記述欄」は、「先生に続けてほしいと思うこと」「自分が先生だったらこうしたいと思うこと」をそれぞれ自由に記述する項目となっている。この記述欄に関しては、学部から指定がある場合はそれに従うことになっているが、本年度は特に指定していない。

### ③ 分析対象科目

全学統一で実施される授業アンケートであるが、対象とする授業科目の選択は学部の判断にゆだねられている。本学部では、基本的に通常の講義科目は全て対象とするが、アンケートの趣旨や学生の自由な意見・感想の表明の機会を確保するという点を鑑み、従来、以下の原則を定め、実施してきた。

- 1) 専任教員および特任教員の担当する科目は原則として実施対象とするが、非常勤講師による授業科目は実施対象としない。それゆえ、集中講義についても実施しない。
- 2) 語学関係科目・演習科目は実施対象としない。
- 3) リレー講義についても実施対象とする。
- 4) 資格科目の講義科目は実施対象としない。
- 5) 登録受講生数が3人未満の授業科目は実施しない。

しかしながら、紙媒体によるアンケート実施に際しては、上記原則にしたがって該当科目にアンケートを配布していたが、2017年度に導入したwebアンケートによって学生が自身の履修科目について行うことになった。その結果、現時点ではこれまで上記原則によってアンケートを行ってこなかった科目も含めた全ての科目が分析対象となっている。

### ④ 分析結果の取り扱い

アンケートがWeb入力になるとともに、アンケート結果についても各教員がUNIPAを通して確認することが可能になった。学生の意見・感想が迅速かつ確実に伝えられることにより、各教員が担当する翌年度以降の授業改善に資することになっていると考える。

期間：2019/07/19（金）00:00～2019/08/01（木）23:59

対象人数(延べ数)：5441人 回答人数(延べ数)：1530人 回答率 28.1%

### 2019年度前期授業アンケート(全学) Review of STUDY in the 1st semester of 2019

この調査の目的は、学生が自らの学びを振り返り改善できるように、学びの履歴を提供すること、そして大学が教育を改善するための情報を得ることです。

以下の設問には、すべて、授業だけではなく、授業外学習も含めて、回答してください。

The purposes of this survey are 1) to offer students a record of progress in study so that they will be able to look back and improve own study, and 2) to collect information for the university to improve education.

## 学びの振り返りシート Review of Your Study

### I あなたの学びに関する項目

#### Items on Your Study

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。

Please select the number which you think most applicable to each statement.

1 総合的に判断して、この授業に満足できた。

The class was satisfactory generally. (必須)

回答内容	比率	人数	4.1点
あてはまらない/Not at all applicable	3%	41人	
あまりあてはまらない/Not applicable	5%	82人	
どちらともいえない/Neutral	10%	156人	
ややあてはまる/Somewhat applicable	43%	658人	
あてはまる/Applicable	39%	593人	

2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。

I used the syllabus to tackle the study in and out of class. (必須)

回答内容	比率	人数	3.1点
あてはまらない/Not at all applicable	18%	273人	
あまりあてはまらない/Not applicable	19%	289人	
どちらともいえない/Neutral	19%	294人	
ややあてはまる/Somewhat applicable	27%	412人	
あてはまる/Applicable	17%	262人	

3 この授業の内容について理解できた。

I was able to understand the contents of the course. (必須)

回答内容	比率	人数	4.0点
あてはまらない/Not at all applicable	2%	26人	
あまりあてはまらない/Not applicable	4%	64人	
どちらともいえない/Neutral	12%	185人	
ややあてはまる/Somewhat applicable	56%	858人	
あてはまる/Applicable	26%	397人	

4 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。

New knowledge, thoughts and techniques were acquired. (必須)

回答内容	比率	人数	4.2点
あてはまらない/Not at all applicable	1%	16人	
あまりあてはまらない/Not applicable	4%	54人	
どちらともいえない/Neutral	8%	126人	
ややあてはまる/Somewhat applicable	44%	672人	
あてはまる/Applicable	43%	662人	

5 この授業の受講によって、学業への興味・関心（意欲）が高まった。 This course heightened your interest and desire for study. (必須)	比率	人数	4.0点
あてはまらない/Not at all applicable	3%	51人	
あまりあてはまらない/Not applicable	6%	85人	
どちらともいえない/Neutral	14%	215人	
ややあてはまる/Somewhat applicable	45%	681人	
あてはまる/Applicable	33%	498人	
6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした。 I tried to think and practice what I have learned in this course. (必須)	比率	人数	3.4点
あてはまらない/Not at all applicable	8%	123人	
あまりあてはまらない/Not applicable	13%	203人	
どちらともいえない/Neutral	26%	397人	
ややあてはまる/Somewhat applicable	36%	553人	
あてはまる/Applicable	17%	254人	
7 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。 In order to deepen the study, I did research and questioned. (必須)	比率	人数	3.4点
あてはまらない/Not at all applicable	10%	147人	
あまりあてはまらない/Not applicable	14%	221人	
どちらともいえない/Neutral	20%	311人	
ややあてはまる/Somewhat applicable	37%	563人	
あてはまる/Applicable	19%	288人	
8 授業1回当たりの授業外学習（予習・復習・課題や試験のための学習・関連する読書や活動など）は何時間でしたか。 How long did you study for each class(preparation, review, assignment, report)? (必須)	比率	人数	1.8点
30分未満/Almost nothing	50%	768人	
30分～1時間未満/About 30 minutes	28%	433人	
1時間～2時間未満/1 to 2 hours	14%	213人	
2時間～4時間未満/2 to 4 hour	5%	78人	
4時間以上/Over 4 hours	2%	38人	
9 この授業を何回欠席しましたか。How many times were you absent from the class? (必須)	比率	人数	1.9点
0回/0 time	51%	779人	
1回/1 time	23%	356人	
2回/2 times	15%	236人	
3～4回/3 to 4 times	8%	129人	
5回以上/Over 5 times	2%	30人	

## II 地域に関する学びの項目（関連がなかった授業では回答しないでください）

Concerning your study on Mie (Please do not answer if this class is irrelevant to Mie ).

10 この授業の受講によって、三重県や地域への興味・関心が高まった。（地域のことを扱わなかった授業では、「該当なし」を選び、扱っていた授業では「あてはまらない」～「あてはまる」を選んでください） This course has increased your interest in issues related to Mie. (Please select the "The course isn't applicable to this Q" if this class is irrelevant to Mie ). (必須)	比率	人数	1.1点
--	----	----	------



該当なし/The course isn't applicable to this Q		60%	921人
あてはまらない/Not at all applicable		6%	92人
あまりあてはまらない/Not applicable		10%	146人
ややあてはまる/Somewhat applicable		16%	246人
あてはまる/Applicable		8%	125人

### Ⅲ 4つの力に関する項目①

#### Items on Four Key Abilities ①

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。(4つの力は、大学生としての活動のすべてを通して身につけるものです。また、各授業においても、4つの力の重点度には軽重がありますが、4つの力のすべてに回答してください。)

Please select the number which you think most applicable to each statement.(The four Key Abilities are acquired through all activities as a university student including out of class study. Please respond to all the four key abilities.)

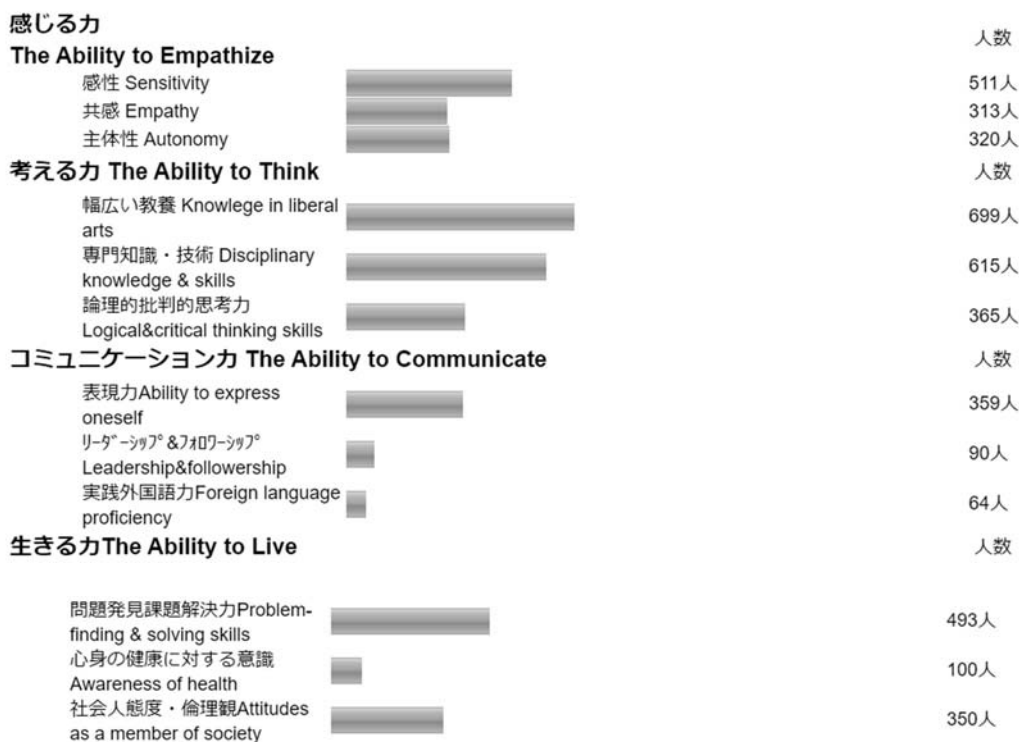
11 この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う。 My 'Ability to Empathize' has grown through this course. (必須)		比率	人数	2.0点
全く成長しなかった/Not at all grew		9%	145人	
わずかながら成長した/Grew slightly		24%	372人	
少し成長した/Grew a little		27%	420人	
ある程度成長した/Grew to some extent		30%	453人	
かなり成長した/Grew considerably		9%	140人	
12 この授業を通して、「考える力」が成長したと思う。 My 'Ability to Think' has grown through this course. (必須)		比率	人数	2.5点
全く成長しなかった/Not at all grew		4%	61人	
わずかながら成長した/Grew slightly		16%	245人	
少し成長した/Grew a little		25%	389人	
ある程度成長した/Grew to some extent		37%	567人	
かなり成長した/Grew considerably		18%	268人	
13 この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う。 My 'Ability to Communicate' has grown through this course. (必須)		比率	人数	1.3点
全く成長しなかった/Not at all grew		38%	577人	
わずかながら成長した/Grew slightly		22%	335人	
少し成長した/Grew a little		20%	300人	
ある程度成長した/Grew to some extent		15%	231人	
かなり成長した/Grew considerably		6%	87人	
14 この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う。 My 'Ability to Live' has grown through this course. (必須)		比率	人数	1.9点
全く成長しなかった/Not at all grew		15%	232人	
わずかながら成長した/Grew slightly		25%	378人	
少し成長した/Grew a little		25%	385人	
ある程度成長した/Grew to some extent		26%	403人	
かなり成長した/Grew considerably		9%	132人	

#### IV 4つの力に関する項目②

##### Items on Four Key Abilities ②

以下の「4つの力の構成要素」の観点について、この授業を通して成長したと思えるものを選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

Among the components of the four key abilities shown below please select those you feel grew through this course.



(以下、「授業改善のためのアンケート」です。)

Questionnaires on Improving the Quality of Education are as follows

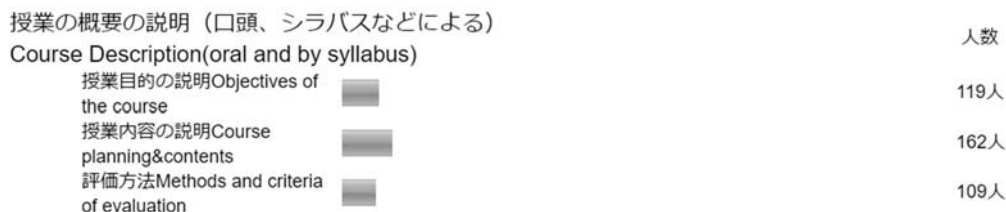
#### 授業改善のためのアンケート Improve the Quality of Education

















##### V 教育改善の項目

##### Items for the Improvement of Education

この授業をもっとよくするためには、どのような点を改善すればいいと考えますか。以下の項目から選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。 In order to make this course better what do you think should be improved?

Please select from Items below. You may select as many as you Method to answer this question is the same as IV.



教室内で使用する教材		人数
Teaching Materials in Class		
授業内で提示される資料		146人
Materials presented		
配布資料/Web資料/Moodle		119人
Distributed materials		
教員の行動(話し方、わかりやすい説明、発展的な内容の説明、学習内容の活用の説明、不謹慎行動への対処など)		
Behavior of the instructor (including Speech(easy listening comprehension),Explanation easy to understand,Explanation of contents in development,Explanation of practical application,Actions toward indiscreet students' behaviors)		人数
話し方Speech(easy listening comprehension)		102人
わかりやすい説明Explanation easy to understand		158人
発展的な内容Explanation of contents in development		57人
学習内容の活用Explanation of practical application		66人
不謹慎行動への対処toward indiscreet behaviors		37人
授業における学生参加の機会		人数
Opportunities for Students' Participation in class		
学生に考えさせる工夫Means to make us to think		122人
質問の機会To ask questions in class		60人
学生との対話の機会To discuss with each other		61人
学生同士の交流To deepen mutual understandings		71人
補足 (グループ活動の実施や支援など)		
Note:Opportunities among students to mutually dig problems deeply(group works and support for them)		
授業外学習のための支援		人数
Support for Off Class Learning		
自学自習のための情報		95人
Information on self-study		
授業外での課題や宿題Subjects for off-class study		55人
学習に対する助言や補足		91人
Advising for learning		
質問や課題への適切な対応		40人
Responses to questions		
Moodleや電子メール等の使用Use of Moodle or email		42人
補足:参考図書・参考資料等も含む		
Note:inc.reference book & materials		
その他教員から指定のある項目		人数
教員の指定項目Items specified by the Instructor		3人

期間：2020/01/21（火）00:00～2020/02/03（月）23:59

対象人数(延べ数)：5421人 回答人数(延べ数)：1108人 回答率 20.4%

## 2019年度後期授業アンケート(全学) Review of STUDY in the 2nd semester of 2019

この調査の目的は、学生が自らの学びを振り返り改善できるように、学びの履歴を提供すること、そして大学が教育を改善するための情報を得ることです。

以下の設問には、すべて、授業だけではなく、授業外学習も含めて、回答してください。

The purposes of this survey are 1) to offer students a record of progress in study so that they will be able to look back and improve own study, and 2) to collect information for the university to improve education.

## 学びの振り返りシート Review of Your Study

### I あなたの学びに関する項目

#### Items on Your Study

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。

Please select the number which you think most applicable to each statement.

#### 1 総合的に判断して、この授業に満足できた。

The class was satisfactory generally. (必須)

回答内容	比率	人数	合計
あてはまらない / Not at all applicable	2%	19人	4.3点
あまりあてはまらない / Not applicable	3%	28人	
どちらともいえない / Neutral	9%	99人	
ややあてはまる / Somewhat applicable	38%	422人	
あてはまる / Applicable	49%	540人	

#### 2 授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した。

I used the syllabus to tackle the study in and out of class. (必須)

回答内容	比率	人数	合計
あてはまらない / Not at all applicable	17%	190人	3.2点
あまりあてはまらない / Not applicable	15%	167人	
どちらともいえない / Neutral	20%	217人	
ややあてはまる / Somewhat applicable	26%	283人	
あてはまる / Applicable	23%	251人	

#### 3 この授業の内容について理解できた。

I was able to understand the contents of the course. (必須)

回答内容	比率	人数	合計
あてはまらない / Not at all applicable	1%	14人	4.2点
あまりあてはまらない / Not applicable	3%	36人	
どちらともいえない / Neutral	8%	94人	
ややあてはまる / Somewhat applicable	50%	552人	
あてはまる / Applicable	37%	412人	

#### 4 新しい知識・考え方・技術などが獲得できた。

New knowledge, thoughts and techniques were acquired. (必須)

回答内容	比率	人数	合計
あてはまらない / Not at all applicable	1%	10人	4.4点
あまりあてはまらない / Not applicable	3%	31人	
どちらともいえない / Neutral	6%	71人	
ややあてはまる / Somewhat applicable	39%	428人	
あてはまる / Applicable	51%	568人	

5 この授業の受講によって、学業への興味・関心（意欲）が高まった。  
This course heightened your interest and desire for study. (必須) 比率 人数 4.2点

あてはまらない/Not at all applicable	2%	23人
あまりあてはまらない/Not applicable	4%	40人
どちらともいえない/Neutral	10%	111人
ややあてはまる/Somewhat applicable	41%	459人
あてはまる/Applicable	43%	475人

6 この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際に試してみたりした。  
I tried to think and practice what I have learned in this course. (必須) 比率 人数 3.6点

あてはまらない/Not at all applicable	6%	71人
あまりあてはまらない/Not applicable	11%	119人
どちらともいえない/Neutral	21%	238人
ややあてはまる/Somewhat applicable	37%	411人
あてはまる/Applicable	24%	269人

7 学びを深めるために、調べたり尋ねたりした。  
In order to deepen the study, I did research and questioned. (必須) 比率 人数 3.7点

あてはまらない/Not at all applicable	7%	79人
あまりあてはまらない/Not applicable	10%	109人
どちらともいえない/Neutral	19%	209人
ややあてはまる/Somewhat applicable	35%	388人
あてはまる/Applicable	29%	323人

8 授業1回当たりの授業外学習（予習・復習・課題や試験のための学習・関連する読書や活動など）は何時間でしたか。  
How long did you study for each class(preparation, review, assignment, report)? (必須) 比率 人数 1.9点

30分未満/Almost nothing	45%	504人
30分～1時間未満/About 30 minutes	28%	308人
1時間～2時間未満/1 to 2 hours	18%	204人
2時間～4時間未満/2 to 4 hour	5%	54人
4時間以上/Over 4 hours	3%	38人

9 この授業を何回欠席しましたか。How many times were you absent from the class? (必須) 比率 人数 1.9点

0回/0 time	51%	560人
1回/1 time	23%	255人
2回/2 times	16%	180人
3～4回/3 to 4 times	9%	96人
5回以上/Over 5 times	2%	17人

## II 地域に関する学びの項目（関連がなかった授業では回答しないでください）

Concerning your study on Mie (Please do not answer if this class is irrelevant to Mie ).

10 この授業の受講によって、三重県や地域への興味・関心が高まった。（地域のことを扱わなかった授業では、「該当なし」を選び、扱っていた授業では「あてはまらない」～「あてはまる」を選んでください） 比率 人数 0.9点

This course has increased your interest in issues related to Mie. (Please select the "The course isn't applicable to this Q" if this class is irrelevant to Mie ). (必須)

該当なし/The course isn't applicable to this Q		68%	748人
あてはまらない/Not at all applicable		3%	37人
あまりあてはまらない/Not applicable		7%	76人
ややあてはまる/Somewhat applicable		15%	168人
あてはまる/Applicable		7%	79人

### Ⅲ 4つの力に関する項目①

#### Items on Four Key Abilities ①

以下の項目について当てはまると思う数字を選んでください。(4つの力は、大学生としての活動のすべてを通して身につけるものです。また、各授業においても、4つの力の重点度には軽重がありますが、4つの力のすべてに回答してください。)

Please select the number which you think most applicable to each statement.(The four Key Abilities are acquired through all activities as a university student including out of class study. Please respond to all the four key abilities.)

11 この授業を通して、「感じる力」が成長したと思う。 My 'Ability to Empathize' has grown through this course. (必須)		比率	人数	2.2点
全く成長しなかった/Not at all grew		8%	93人	
わずかながら成長した/Grew slightly		22%	239人	
少し成長した/Grew a little		29%	320人	
ある程度成長した/Grew to some extent		28%	312人	
かなり成長した/Grew considerably		13%	144人	
12 この授業を通して、「考える力」が成長したと思う。 My 'Ability to Think' has grown through this course. (必須)		比率	人数	2.6点
全く成長しなかった/Not at all grew		3%	36人	
わずかながら成長した/Grew slightly		13%	140人	
少し成長した/Grew a little		25%	276人	
ある程度成長した/Grew to some extent		37%	406人	
かなり成長した/Grew considerably		23%	250人	
13 この授業を通して、「コミュニケーション力」が成長したと思う。 My 'Ability to Communicate' has grown through this course. (必須)		比率	人数	1.5点
全く成長しなかった/Not at all grew		32%	350人	
わずかながら成長した/Grew slightly		22%	246人	
少し成長した/Grew a little		20%	219人	
ある程度成長した/Grew to some extent		17%	191人	
かなり成長した/Grew considerably		9%	102人	

14 この授業を通して、「生きる力」が成長したと思う。 My 'Ability to Live' has grown through this course. (必須)	比率	人数	2.1点
全く成長しなかった／Not at all grew	12%	128人	
わずかながら成長した／Grew slightly	22%	249人	
少し成長した／Grew a little	26%	287人	
ある程度成長した／Grew to some extent	27%	303人	
かなり成長した／Grew considerably	13%	141人	

#### IV 4つの力に関する項目②

##### Items on Four Key Abilities ②

以下の「4つの力の構成要素」の観点について、この授業を通して成長したと思えるものを選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。

Among the components of the four key abilities shown below please select those you feel grew through this course.

##### 感じる力

##### The Ability to Empathize

	人数
感性 Sensitivity	336人
共感 Empathy	200人
主体性 Autonomy	286人

##### 考える力 The Ability to Think

	人数
幅広い教養 Knowledge in liberal arts	470人
専門知識・技術 Disciplinary knowledge & skills	539人
論理的批判的思考力 Logical&critical thinking skills	299人

##### コミュニケーション力 The Ability to Communicate

	人数
表現力 Ability to express oneself	303人
リーダーシップ & フォロワーシップ Leadership&followership	101人
実践外国語力 Foreign language proficiency	40人

##### 生きる力 The Ability to Live

	人数
問題発見課題解決力 Problem-finding & solving skills	375人
心身の健康に対する意識 Awareness of health	81人
社会人態度・倫理観 Attitudes as a member of society	259人

(以下、「授業改善のためのアンケート」です。)

Questionnaires on Improving the Quality of Education are as follows

#### 授業改善のためのアンケート

#### Improve the Quality of Education






話し方Speech(easy listening comprehension)		62人
わかりやすい説明Explanation easy to understand		85人
発展的内容Explanation of contents in development		50人
学習内容の活用Explanation of practical application		37人
不謹慎行動への対処toward indiscreet behaviors		23人
<b>授業における学生参加の機会</b>		<b>人数</b>
<b>Opportunities for Students' Participation in class</b>		
学生に考えさせる工夫Means to make us to think		79人
質問の機会To ask questions in class		57人
学生との対話の機会To discuss with each other		55人
学生同士の交流To deepen mutual understandings		42人

## V 教育改善の項目

### Items for the Improvement of Education

この授業をもっとよくするためには、どのような点を改善すればいいと考えますか。以下の項目から選んでください。なお、いくつ選んでもかまいません。In order to make this course better what do you think should be improved?

Please select from Items below. You may select as many as you Method to answer this question is the same as IV.

授業の概要の説明（口頭、シラバスなどによる）		人数
Course Description(oral and by syllabus)		
授業目的の説明Objectives of the course		54人
授業内容の説明Course planning&contents		94人
評価方法Methods and criteria of evaluation		79人
教室内で使用する教材		人数
Teaching Materials in Class		
授業内で提示される資料Materials presented		100人
配布資料/Web資料/Moodle Distributed materials		82人
教員の行動(話し方、わかりやすい説明、発展的な内容の説明、学習内容の活用の説明、不謹慎行動への対処など)		人数
Behavior of the instructor (including Speech(easy listening comprehension),Explanation easy to understand,Explanation of contents in development,Explanation of practical application,Actions toward indiscreet students' behaviors)		



補足（グループ活動の実施や支援など）

Note: Opportunities among students to mutually dig problems deeply (group works and support for them)

授業外学習のための支援

Support for Off Class Learning	人数
自学自習のための情報 Information on self-study	77人
授業外での課題や宿題 Subjects for off-class study	42人
学習に対する助言や補足 Advising for learning	59人
質問や課題への適切な対応 Responses to questions	29人
Moodleや電子メール等の使用 Use of Moodle or email	23人

補足: 参考図書・参考資料等も含む

Note: inc. reference book & materials

その他教員から指定のある項目

教員の指定項目 Items specified by the Instructor	人数
	1人

## 2. 分析結果

学生から回答されたアンケートに基づき、昨年度との比較をしつつ、分析結果を考察する。

授業アンケートの学生の回答率は、前期 28.1%、後期が 20.4%であり、昨年度前期 30.0%、後期 20.8%と比べると回答率は下がっている。また、今回も前期に比し後期の回答率が悪化した点、そして大幅にアンケート回答率が減少した昨年度より今回の回答率はさらに減少していることは、今後の課題とすべき点である。なお、前述のとおり本学部では授業アンケート対象科目を原則として専任（特任）教員の講義に限り、演習や資格科目等は除外する原則をとってきたが、その原則がwebアンケートには反映されていないことから、学生の側では区別なく回答している。昨年度も指摘されたことだが、除外科目については教員からの回答を促す指導はなされていないため、当然回答率は低くなる。そして、学部全体のアンケート回答率はこうした科目をすべて含んだ数字となっている。この点は依然として検討が必要であるものの、人文学部の授業アンケートの回答率が他学部と比べて低いとされる背景には、このような理由が存在していることを再度確認しておきたい。

さて、学びの振り返りシートの冒頭、設問1「総合的に判断して、この授業に満足できた」という問いは、いわゆる「総合的満足度」と通称されるように、学生の授業評価として最も重視される項目である。前期 4.1点、後期 4.3点と昨年度に引き続き4点を超える数値を示しており、満足度の高い評価を得ていると言えよう。関連する項目としては、設問3「この授業の内容について理解できた」や設問4「新しい知識・考え方・技術などが獲得できた」、設問5「この授業の受講によって、学業への興味・関心（意欲）が高まった」も総じて昨年同様の4点前後である。この点は、設問11～17で問われている「四つの力」の成長の自己評価として、「考える力」の成長を認める学生が最も多く、またその内容も「感性」「幅広い教養」「専門知識・技術」（設問16）が多数を占めている。大学教育としてあるべき役割とはたしていると評価することができよう。

一方で、設問2「授業内外の学習に取り組むために、シラバスを活用した」については昨年同様であり、設問6「この授業で学んだことや考え方について、意識するようになり実際にためしてみたりした」、7「学びを含めるために、調べたり尋ねたりした」も、昨年度同様である。すべての授業について取り組むのは無理だと思われるが、学んだことや考え方について、教室以外の場所で「活用」することを学生に意識させる指導についても検討すべきであろう。

設問8で問われた授業1回当たりの授業外学習時間も昨年同様に2点に満たず、30分未満とする回答が最多である。アンケートの冒頭でも注記がされているが、大学での単位制度は、1回あたり90分の授業と4時間の授業外学習に対して2単位が配当されることになっており、現実との隔絶が悩ましい。だが、アンケートの実施期間が試験前であることを考えると、30分未満の学習しか行っていない学生は少ないと考える。昨年度の指摘と重複するが、「関連する読書や活動など」を含むことについて学生たちへの周知が必要であろう。なお授業の出欠状況（設問9）は、昨年度同様にほぼ2点台以下（すなわち、平均して欠席が1回以下）の数値であり、授業に積極的に出席してきた学生がアンケートに回答したとも考えられるものの、それでもなお、アンケートに回答した学生たちの真面目な出席状況が健在である。

次に、FDとの関係で注目すべき**授業改善のためのアンケート**について検討しよう。そもそも授業方法は科目について最適な方法がこの教員によって選択されており、一律ではないことから、集計されたデータが必ずしも意味をなすとはいえない。

そのような問題はあるとはいえ、アンケート結果からは、両学科に共通する項目として、「27. 授業内容の説明」および「32. わかりやすい説明」を求める声が多い。他方、両学科を比べて文化学科により多かった要望が「39. 学生同士の交流」（前期）、法律経済学科により多かった要望が、「36. 学生に考えさせる工夫」（前期）「40. 自学自習のための情報」（前期・後期）である。この背景には、文化学科の少人数教育、そして文化学科よりも1科目の履修者が多い科目が多数を占める法律経済学科といった、各学科特有の理由があると考えられる。

## V. 教員による「授業に関するアンケート」



## V. 教員による「授業に関するアンケート」

### 1. アンケートの概要

#### アンケートの目的と方法

教員による「授業に関するアンケート」は、教員が授業で使用している教材や授業で行っている工夫などについての基礎データを収集し分析することにより、次年度以降の教育内容・教育方法の改善のための資料提供を行うことを主な目的としている。

実施については、学生による授業アンケート実施と同時期に、各教員に用紙を配布し、学務担当に設置するボックスにて回収を行った。

#### ①質問項目（巻末資料参照）

昨年度の項目をもとに作成した。

#### ②調査対象科目

専任教員および特任教員が担当する人文学部専門課程（前期・後期）の講義と演習科目を対象に調査を行った。回収されたのは 129 科目（文化学科 106 科目、法律経済学科 23 科目）である。

なお、リレー講義科目については、昨年度と同様、一つの科目に複数の教員からの回答が集計されている場合がある。

#### ③アンケート結果分析の視点

前期科目と後期科目の区別はせず、人文学部全体、文化学科、法律経済学科の 3 区分で集計した。また昨年度と同じ質問・選択肢については、昨年度と比較し増減ポイントを示した。昨年度とはアンケート回収科目数が異なるので（昨年度の回答数は文化学科 133、法律経済学科 25、人文学部合計 158）、増減ポイントはあくまでも参考である。

### 2. 分析結果

(1) 授業で使用している教材・機器については、「プリント」が最も多く、例年の傾向と変わらない。各項目の増減ポイントも、昨年度に比べて有意差があるといえるほどの変化はない。項目⑥（今年度の工夫・改善）で Moodle の活用が複数挙げられているが、項目①での Moodle の使用の状況は、昨年度と比べてポイントの増加は見られない。新たに Moodle を活用した科目が増えた一方で、今年度は Moodle を使用しない科目が多かったということだろう。

(2) 授業で取り入れているものについては、人文学部全体では「学生を指名する」が 58.1% と最も多い。学科別で見ると、文化学科では「学生を指名する」が最も多く、次いで「ディスカッション」、「(学生による)プレゼンテーション」が多い。法律経済学科では「Moodle」

が最も多く、次いで「小テスト」、「ビデオ・DVD」が多い。学生の指名やディスカッション、Moodle の利用が多いということは、教員から一方通行の講義ではなく、学生との双方向のコミュニケーションを重視した授業運営がされていると考えられる。また、法律経済学科では「小テスト」が昨年度より 15.1 ポイント増加している。項目④（意欲向上）の自由記述でも小テストを課しているという回答があることから、小テストの導入は、学生の学習到達度の確認だけでなく、学生の学習意欲喚起もその目的とされているようである。

(3) 自由記述（項目④意欲向上、項目⑥今年度の工夫・改善）については、抄録ではあるが、主なものを紹介しておく。概観すると、学習のための資料紹介、確認テスト、予習・課題、復習・フィードバック、学生のプレゼンテーションやディスカッションの指導に関する記述が多いように見受けられる。資料紹介については、学生にとって身近なもの、専門的なもの、最新情報へのアップデート、Moodle やオンライン資料の活用といった工夫が見られる。予習については、毎回の課題を与える、資料を事前配布して予習を促すという方法が多い。復習については、リアクション・ペーパーや小テストによって学生の理解度や学習到達度を把握するという方法が多い。コメントのフィードバックや、レポートの文章表現を添削して返却する等、丁寧な指導を行っている旨の記述が少なからず見受けられた。

資料を提示したり課題を与えたりすることで学生の学習意欲を喚起し、個々の予習を促し、授業においては学生とのコミュニケーションを行い、小テストやフィードバックによる丁寧な指導を行う、という取り組みが浮かび上がってくる。学生には、教員の取り組みを契機として、さらに能動的・意欲的に学習の方法を模索し、自ら取り組み、学習を深めていくことを期待したい。

#### ①授業で使用している教材・機器

表V-1 使用している教材・機器（単位：授業数、複数回答可）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
人文学部	34	117	32	42	0	37	14	9	27	3
129	26.4%	90.7%	24.8%	32.6%	0.0%	28.7%	10.9%	7.0%	20.9%	2.3%
増減ポイント	-3.9	+2.8	-3.6	+4.2	-1.0	-0.4	-3.0	-0.0	-1.2	-2.7
文化	28	97	24	34	0	28	12	9	17	3
106	26.4%	91.5%	22.6%	32.1%	0.0%	26.4%	11.3%	8.5%	16.0%	2.8%
増減ポイント	-5.1	+3.6	-4.4	+5.8	-1.0	-2.1	-3.7	+0.3	+0.3	-1.7
法律経済	6	20	8	8	0	9	2	0	10	0
23	26.1%	87.0%	34.8%	34.8%	0.0%	39.1%	8.7%	0.0%	43.5%	0.0%
増減ポイント	+2.1	-1.0	-1.2	-5.2	0.0	+7.1	+0.7	-4.0	-12.5	-8.0

注1) 表中の 1~10 は次の通り。1. 教科書、2. プリント、3. 参考書、4. ビデオ・DVD、5. OHP、6. パワーポイント、7. パソコン（6 以外）、8. 実物または模型、9. リアクシ

ン・ペーパー、9. Moodle、10. その他。

注2) 増減は2018年度の構成比との比較で、参考までに記載した。

## ②取り入れている授業方法

表V-2 取り入れている授業方法（単位：授業数、複数回答可）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
人文学部	75	41	6	2	2	51	41	31	28	28	8
129	58.1%	31.8%	4.7%	1.6%	1.6%	39.5%	31.8%	24.0%	21.7%	21.7%	6.2%
増減ポイント	+1.2	+7.8	-0.9	-7.2	-7.2	-13.6	-3.0	-2.5	+0.9	+2.1	+1.8
文化	69	33	3	2	1	46	37	26	18	19	4
106	65.1%	31.1%	2.8%	1.9%	0.9%	43.4%	34.9%	24.5%	17.0%	17.9%	3.8%
増減ポイント	+5.0	+7.1	-2.4	-7.1	-8.1	-15.9	-2.6	-2.5	-1.7	-0.8	-0.7
法律経済	6	8	3	0	1	5	4	5	10	9	4
23	26.1%	34.8%	13.0%	0.0%	4.3%	21.7%	17.4%	21.7%	43.5%	39.1%	17.4%
増減ポイント	-13.9	+10.8	+5.0	-8.0	-3.7	+1.7	-2.6	-2.3	+11.5	+15.1	+13.4

注1) 表中の1～11は次の通り。1. 学生を指名する。2. ビデオ・DVD、3. 現場見学・観察、4. 実習、実地調査、5. ディベート、6. ディスカッション、7. (学生による) プレゼンテーション、8. リアクション・ペーパー、9. Moodle、10. 小テスト、11. その他。

### 項目11「その他」の記載例

・直接インタビュー／次回範囲に関する質問票の作成／音源資料／中間テスト／中間レポート／レポート／学外懸賞論文への挑戦

## ③試験・レポートの返却

表V-3 試験・レポートの返却（単位：授業数）

	全員に返却	希望者に返却	返却しない	試験・レポートを課していない
人文学部	34	32	41	22
129	26.4%	24.8%	31.8%	17.1%
増減ポイント	+4.4	+4.0	+0.8	-5.0
文化	20	31	36	19
106	18.9%	29.2%	34.0%	17.9%
増減ポイント	-0.6	+4.4	+4.0	-5.4
法律経済	14	1	5	3
23	60.9%	4.3%	21.7%	13.0%

増減ポイント	+24.9	+4.3	-14.3	-3.0
--------	-------	------	-------	------

④学生の独習の意欲を向上させるための工夫(抄録、類似内容(複数回答)については要約)

文化学科：

(資料紹介)

- ・ 書籍や資料、参考書を紹介している。/・ 文献リストを配布。
- ・ 影印史料などなるべく実際に近い史料を示す。
- ・ 通説・定説を提唱した学者や論文を紹介している。
- ・ 学生の疑問に応じて、適宜、資料や専門書、論文を紹介している。
- ・ 適宜情報整理のためのプリントを作成して配布。時事問題とかかわる事柄についてはタイムリーなニュース記事をその都度配布した。

(確認テスト)

- ・ 小テストで学習状況を確認している。
- ・ 中間テストを実施し、学生の理解状況を把握している。また、その解答傾向から、受講生の理解が不十分な点を把握し、学期末のレポートではその点を含めた課題を出すようにしている。

(予習・課題)

- ・ 宿題を課している。
- ・ 資料の事前配付(事前学習)。
- ・ 文献(テキスト)の担当部分を決めて、発表要旨をまとめてもらう。
- ・ 毎回、次の授業までの課題を出している。
- ・ 小さな課題を、トピックが変わるごとに与えている。
- ・ 段階的に課題を課し、達成度を測れるようにする。
- ・ 小グループでゼミ論文の作成を課している。
- ・ グループとして共通の課題に取り組ませつつ、個々の達成度を細かくチェックしている。
- ・ 事前にテキストを精読させ、質問を考えさせ、疑問点を整理させる。
- ・ レジュメ提出にコメントし、発表までに不足している点を意識させるようにしている。(追加調査の必要性を理解し、レジュメの再作成の機会を与えるため) 前回発表テーマを事前に明らかにして、コメント用の自習を促している。

(復習・フィードバック)

- ・ Moodle の活用(宿題、授業の振り返り、コメントのフィードバック)
- ・ リアクション・ペーパー等の活用(学習状況の確認、柔軟な授業、議論)
- ・ 学生の気づきや考察でよかったものを印刷し、全員に配布することを通して、考察の視点や考え方を示唆している。
- ・ 学生による相互評価を取り入れている。



(その他)

- ・ 学生の体験と関係づける質問をしながら、解説する。
- ・ 学生自身の興味に沿って各自テーマを決定している。
- ・ テキスト購読では、多くの受講者の興味がわくテキストを毎年チョイスしている。また、グループワークでは、事前に各自の学問的な関心をアンケートで聞いたうえでテーマを設定している。
- ・ 学生に能動的に史料を探索させて課題解決スキルを身につけさせている。
- ・ 学生の意見や解釈の正誤を判断する前に、必ずいったん認め受け入れるようにしている。同時に、正解は一つではないことを常に銘記させ、自分の意見や感じ方の自信を持たせるようにしている。
- ・ ゲストスピーカーを招いて、様々な社会の実情に触れる機会を作っている。
- ・ 1年生が地域分けに関心を持つように地域の先輩学生を登壇させるとともに、複数の地域の課題をレポートにまとめさせている。
- ・ 映像・写真資料の活用。
- ・ 遺跡や遺物のスライドを見せて理解を助けている。
- ・ パソコンを使用して授業に関連する音源資料を聴かせている。

法律経済学科：

(資料紹介)

- ・ 教材や資料などを紹介している。
- ・ 映像と新聞を多用し、資料等の配布、参考文献の提示を講義中に行っている。

(確認テスト)

- ・ 中間テスト、小テストで学習状況を確認している。
- ・ 中間試験の解説を期末試験前に行っている。

(予習・課題)

- ・ 宿題を課している。/・ 報告を課している。/・ 単元終了ごとにレポートを課している。
- ・ 各回に次回のプリントを配布し、予習を促す。
- ・ 報告者以外の学生にも事前にレジメを配布し、予習を促している。
- ・ レポート課題を、独習しなければレポート作成できないものにしていく。

(復習・フィードバック)

- ・ Moodle に各回の感想等を書かせる。
- ・ 毎回レポートを課し、文章表現や内容について朱をいれて返している。

(その他)

- ・ 学外の懸賞論文への挑戦を奨励している。

## ⑤休講について

### 休講に対する措置

表V-4

	補講を行った	補講に変わる措置を講じた
人文学部	11	43
文化学科	10	32
法律経済学科	1	11

### 補講に変わる措置の例

文化学科：課題を出す／読むべき資料の提示／テキストの精読／通常の授業では読みこなせない分量の作品をじっくり読む機会として課題を課す／美術館見学／展覧会見学の説明を指示／学生のゼミ論文作成を小グループで行わせる／資料に基づくりポート構想を考えさせる

法律経済学科：課題の提示／読むべき資料の提示／報告の準備をさせる／学外の施設見学／専門に関する講演会に出席させる

## ⑥今年度工夫したこと、改善したこと（抄録）

### 文化学科：

- ・Moodle 上での情報・資料提示を頻繁に行うようにした。
- ・調べ物に必要な書籍を多く揃えた。
- ・学生のニーズに合わせ、読解教材のジャンルを広げた。
- ・配付資料のアップデートを行った。
- ・観光ガイドブックなど、身近な資料をとり上げた。
- ・従来はモノクロの影印本を使用していたが、オンライン公開されたカラー画像を各自でダウンロードして使用させた。
- ・受講生のレベルに合わせた説明を増やした。
- ・今話題となっている問題と関連づけて過去の事柄を説明する。
- ・ハンドアウトの引用文の長さを短縮し、詳しい解説をする。
- ・以前は板書の分量がやや多かったので、ポイントをより絞って、解説を中心にした板書を心がけた。
- ・昨年度とくらべて、学生のノートテイキングのスキルの向上を目指し、板書中心の講義にした。
- ・テキストの音読を全員でし、全員が何か作業をする時間を増やした。
- ・発表担当者への他履修者からの質問時間を多くとることにより、押さえられていない基本的知識や説明不足な点を自覚させ、それを補うために調査すべきテーマや資料について考えを述べることを義務化した。他の履修者が質問しやすくなるよう、初回・第2回授業で簡

単なディベートをチーム対抗で行っているが、今年からはデータ調査などの共同作業も課すことで、より発言しやすい空気を作った。

・一人一人の発表時間を多めに取り、発表者が司会も担当し、質疑応答、クイズなどで、受講者との相互の交流がはかれるようにした。

・「教員対学生」ではなく「学生対学生」のディスカッションになるように、進行を心がけた。

・3グループをつくって、ゼミ論文作成の途中経過を報告させピア評価を行わせた

・学生同士で議論をしているときには過剰な介入は避け、必要なコメントは議論が終わるか行き詰まった際にまとめる形で発言するようにした。

・「教員の仕事が、多忙で低賃金でブラック化している」と不安や嫌悪感を抱いている学生が多く見られるので、各々の学生が影響を受けた先生にインタビューさせて、多忙であるが、教員のやりがい、使命感、うれしさなどを引き出そうとした。

・日本人学生と留学生の協働学習のため、極力留学生同士のグループができないようグループ編成に気を配った。

・授業出席とMoodleへのリアクションコメントを両方課している。

・中国語を学習したことのない学生には別途英語の資料の課題を出し（例年は日本語だった）、外国語学習の機会を与え、それにあわせ中国大陸以外の研究、海外における中国語コンテンツの需要を視野に入れた講義内容に変更した。

・論述の試験をMoodleでの課題に変えることによって授業時間の確保をするとともに学生に自己学習の時間を与えた。

#### 法律経済学科：

・レポートの提出を紙媒体からMoodleに変更した。

・e-learningを取り入れた。

・法改正の多い分野では、直近の情報を織り込んだ。

・新しいニュースを見せるためYouTubeを用いた。

・歴史的事件の説明に古い新聞記事を利用した。



## VI. 大学院に関するFD活動



## VI. 大学院に関するFD活動

人文社会科学研究科における大学院教育は、学部教育とは目的は体制、そして規模の点で大きな相違があることから、学部教育とは別個のFD活動を行う必要がある。本年度の大学院教育のFD活動としては、例年実施している大学院生による「授業改善のためのアンケート」、本大学院の組織的な授業である「三重の文化と社会」についての報告会、そして大学院教育に関するFD研修会を行った。なお、例年FD活動の対象としている修士論文発表会は、新型コロナウイルス感染対策のため、今年度は開催できなかった。

### 1. 大学院生による「授業改善のためのアンケート」

大学院生によるアンケートは、従来は各科目ごとではなく、当該年度に履修した全ての科目について総合的な意見を問うものであったが、Webアンケート導入にともなって学部生と同様の各科目についてのアンケートを入力することになった。しかしながら大学院生の場合、履修者が一桁である科目が大半を占めることから、匿名性の確保や自由な意見を述べる機会を確保するためには、本来的には学部生とは異なるアンケート形式が望ましく、この点は全学的にWeb入力となった授業アンケートに関する今後の検討課題である。

本年度の大学院アンケートの結果は、前期対象者の延べ人数104人中回答者は8人(回答率7.7%)、後期対象者の延べ人数104人中回答者は6人(回答率5.8%)であった。昨年度のアンケート結果が前期0人、後期4人であることと比較すれば多少は改善したと言えようが、それでもなお、このアンケート閣下では大学院生たちの授業に対する評価や要望をまとめるのは困難であるため、本年度もデータ結果の掲載は見送らざるを得ない。

すでに昨年度も指摘されていたことであるが、このような結果を招く原因は、大学院教育の実態とアンケートのシステムが対応していないことである。したがって、大学院生による「授業アンケート」に限っては、自由回答欄を主体としたアンケートを別途実施するなど、大学院生の要望を汲み取るための工夫が必要である。

## 2. 「三重の文化と社会」 報告会への教員の参加

大学院教育は基本的に指導教員との個別具体的な指導の下で行われるが、本研究科では地域文化論専攻、社会科学専攻を横断し、一般の院生のみならず社会人院生を含む地域連携型授業として「三重の文化と社会」という科目を修士1年次生の選択科目として開講している。また、修士論文は大学院教育の成果発表として公開で開催してきた。本年度は大学院FDとして「三重の文化と社会」を取り上げ、これまで指導学生を通じて参加してきた教員以外に対しても、「三重の文化と社会」の沿革や現状について理解を深める機会を提供した。そして例年通り、大学院FD活動として、「三重の文化と社会」の学内報告会と現地報告会、および終了年次生による修士論文発表会への参加を教員に促した。なお、2月末に開催予定であった修士論文発表会は、新型コロナウイルス感染防止のため開催前日に中止が決定した。

### ① 出席教員について

まず、3回それぞれの出席教員の内訳は以下の通りである。( )内の数字は、発表者に指導学生が居た教員を示す(内数)。

- ・「三重の文化と社会」学内報告会 地域文化論専攻 3名(1名)、社会科学専攻 4名(2名)
- ・「三重の文化と社会」現地報告会 地域文化論専攻 3名(0名)、社会科学専攻 7名(2名)

\*合計：地域文化論専攻 6名(1名)、社会科学専攻 11名(4名)、計 17名(5名)

昨年度の「三重の文化と社会」の出席者は7名であり、本年度の出席者は増加している。これは指導院生を持たない教員が現地報告会に出席したためである。現地報告会は、大学院生の研究を地域住民に向けて発表するだけでなく、大学院生を通して大学院教育を地域に示す重要な機会である。また、大学院生の研究状況を大学院全体として把握する貴重な機会であるため、指導院生の有無にかかわらず、教員が積極的に参加する方向での取り組みがなおも必要である。

### ② 発表内容について

大学院生の発表内容について、「レベルが高い」から「レベルが低い」まで5段階に分け、教員に感想を求めた。「三重の文化と社会」は、まず、学内報告会が行われ、そこでの質疑応答ならびに指導を踏まえて現地報告会が行われる。指導教員は、学内報告会と現地報告会の間に、地域住民に向けて発表するレベルになる様、集中して大学院生の指導を行うことが少なくない。その結果、下の数値から明らかな様に、学内報告会よりも現地報告会の方が発表内容の評価が高くなっている。ただし、学内発表に対して、昨年度にはなかった「ややレベルが低い」という評価が寄せられており、この点については改善が必要であろう。

「三重の文化と社会」は大学院1年次に履修する院生がほとんどであること、昨年までのフィールド決定(たとえば「尾鷲市」というフィールド)が先行したスタイルから、参加者の研究希望を踏まえてフィールド(「北勢地域」)を決めるという変更が行われたものの、社会人院生や留学生院生など、研究時間の捻出に苦心する者や大量の日本語に接する研究には未だ不慣れな者もいるため、



指導院生に十分な研究報告を行わせる上での水面下の教員の苦心は小さくない。「三重の文化と社会」が求める研究水準に達することが容易ではない大学院生の指導をどうすべきか、指導教員だけに負わせてよいものなのか、今後も継続的な取り組みとして課題を確認するとともに、充実を図っていききたい。

表 「三重の文化と社会」の発表内容について

	レベル が高い	ややレベ ルが高い	どちらとも いえない	ややレベ ルが低い	レベル が低い	無回答	計
「三重の文化 と社会」学内	0 0.0%	3 42.9%	2 28.6%	2 28.6%	0 0.0%	0 0.0%	7 100.0%
「三重の文化 と社会」現地	2 20.0%	6 60.0%	2 20.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	10 100.0%
「三重の文化 と社会」全体	2 11.8%	9 52.9%	4 23.5%	2 11.8%	0 0.0%	0 0.0%	17 100.0%

### ③ 発表の形式について

発表の形式についても、学内報告会では、「やや整っていない」「整っていない」といった、昨年度には見られなかった評価がある。しかしながら、そのような評価は現地報告会では見られなくなっていることから、学内報告会と現地報告会の間に、パワーポイントによる発表等の技術的な指導が手厚く行われたことが推測できる。

表 「三重の文化と社会」の発表の形式について

	整って いた	やや整っ ていた	どちらとも いえない	やや整っ ていない	整って いない	無回答	計
「三重の文化 と社会」学内	1 14.3%	4 57.1%	0 0.0%	1 14.3%	1 14.3%	0 0.0%	7 100.0%
「三重の文化 と社会」現地	8 80.0%	1 10.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 10.0%	10 100.0%
「三重の文化 と社会」全体	9 52.9%	5 29.4%	0 0.0%	1 5.9%	1 5.9%	1 5.9%	17 100.0%

### ④ 質疑について

学内報告会の「充実していた」「やや充実していた」の合計は7割強、現地報告会では9割というように、ここでも学内報告会を踏まえての工夫が現地報告会で評価されていることがわかる。また、学内報告会とは異なり、現地報告会では、地域住民からの想定外の質問や意見が出されることがあ

るが、今回においては報告者がそれなりに質疑応答に対応していたことが高い評価につながったものと考えられる。

表 「三重の文化と社会」の質疑について

	充実していた	やや充実していた	どちらともいえない	やや充実していなかった	充実しなかった	無回答	計
「三重の文化と社会」学内	4 57.1%	1 14.3%	2 28.6%	0 28.6%	0 0.0%	0 0.0%	7 100.0%
「三重の文化と社会」現地	6 60.0%	3 30.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 01.0%	10 100.0%
「三重の文化と社会」全体	10 58.8%	4 23.5%	2 11.8%	0 0.0%	0 0.0%	1 5.9%	17 100.0%

⑤ 「三重の文化と社会」のあり方についての自由回答

(学内報告会)

- ・受講生の増加が課題だと思います。教員の意識化も必要。
- ・今年度は各院生の指導教員の先生方にも何度も講義にご出席いただき、担当教員としては講義が進めやすかったです。
- ・院生、教員ともに余裕がないのか、参加者が少ないところが気になります。

(現地報告会)

- ・学内発表会での先生方の指導を受けて、学生・院生ともに非常に大きく内容が改善されていた。
- ・これまでも大変大きな役割を果たしてこれでしたが、これからもどうかよろしくお願い申し上げます。
- ・授業の運営は大変でしょうが、継続することは大事だと思います。

⑥ 「三重の文化と社会」の報告会についての自由回答

(学内報告会)

- ・教員の参加をもっと促したいものです。
- ・今回は院生の準備不足がやや目立ちました。
- ・少しでも関係しそうな人に聞かせた方がいいですね。
- ・担当者、指導教員以外の参加を増やす工夫が必要。時期や場所を検討すべき。

(現地報告会)

- ・今年是一般の方からの質問が多くあり、研究成果のフィードバックという点でとても有意義だった

たのではないかと思います。また、今年は北勢サテライトの方や研究推進課の方が当日の運営のご支援を下さり本当に助かった。ぜひ、来年以降もこのような体制で報告会を実施したい。

- ・学内発表会での指摘をふまえて現地報告会での院生の発表は格段に改善され、わかりやすい発表になっていたのではないかと思います。発表会全体についてですが、3部構成にしたことで内容は充実しましたが、やや時間が長く、詰め込みすぎの印象もあります。このあたりは次年度に向けた課題かと思えます。
- ・キーパーソンのHearingが必要となります。
- ・もう少し、外部の方の参加があると良いと思いました。
- ・広報がふるく、一般参加者が少ない状況が続いている。行政・民間との共同報告があっても良いのではないかと。
- ・質疑を活発にするため、パネルディスカッション方式の導入があっても良い。
- ・それぞれが専門とする学問分野のもつ手法、アプローチ・分析の違いを一度に感じることができ、興味深いとともにそこから自らにとって得るものもあったと思われる。
- ・今回は質疑応答が充実しており（発言がたくさんあり、良かったと思います）。
- ・発表テーマに関連する行政側・民間側等の関係者に、現地報告会への参加とコメントをさらに促すことができると良いと思えます。
- ・開催日の変更→両学科の卒論締め切りの後でなければ出席する余裕がないのでは。
- ・学内報告と比較すると、1週間弱という短い時間であるものの、人に見せる報告を意識したプレゼンという点でかなり改善されている印象を受けました。

#### ⑦ 大学院教育に関する意見

- ・研究内容を、指導教員や専門家だけでなく、専門外の人にも適切に情報発信して伝えるための考え方やテクニックも教えるべき時代だと思いました。
- ・基本的には指導教員に任せるべきかと思えます。
- ・大学院生全員が何らかの形で参加できる様な研究、フィールドワーク、あるいは地域の人との共同研究。

#### 総括

「三重の文化と社会」報告会の課題は、当該科目を履修した学生を指導していない教員の参加を増やすこと、そして、本学が重視している地域とのつながりとの点で、地域住民のさらなる参加に向けての働きかけを行うことを通じて、大学院生の研究内容を伝える機会を増やすことであろう。個別指導が基本となる大学院生にとって、研究対象が異なる他の大学院生と同じ科目を履修する機会は、大学院生同士の交流にとっても、また、自らの研究内容を他者にわかりやすく伝える訓練としても有意義である。したがって、今後も、「三重の文化と社会」の履修者数を維持するとともに、大学院全体でこの科目を見守り続けることも重要である。

### 3. 大学院に関するFD研修会

本年度も昨年度に引き続き大学院教育についてのFD研修会を11月に実施した。大学院教育は指導学生の有無によって議論への参加のしやすさが異なることから、本年度は、本学の大学院教育において特に力を入れて取り組んできた問題発見型および地域連携科目である「三重の文化の社会」を取り上げ、この科目の立ち上げの時期から継続的に関わってくれている教員による講演を行った。

日時：2019年11月13日（水）14:00-15:00

テーマ：「三重の文化と社会」について（講師：豊福裕二氏）

アンケート結果は以下の通りである。

1. 今回の研修会の内容について、総合的な判断をお示しください。

大変良かった	良かった	普通	あまり良くなかった	良くなかった
15	15	1	0	0

2. 大学院科目「三重の文化と社会」について、これまでの関りをお書き下さい

（該当する方は複数項目に回答ください）。

授業を担当したことがある。	ゼミ生で受講した者が居る（授業での指導等に参加した）。	学期末の報告会などに参加したことがある。	全く関わっていない。
5	8	13	11

3. 今回の研修会を受けて、大学院科目「三重の文化と社会」についてのご意見、感想をお書き下さい。

- ・継続することは重要だと思います。また地元での発表会の内容については基調講演やシンポジウムなどの工夫があってもよいのではないかと思いました。
- ・現地とのつながり、プレゼン勉強 etc 院生にとって、学ぶべきことの多い科目であることがよくわかりました。しかし外国の文献中心の学問については、院生にはフィールドワークよりも基礎学力をつけてもらいたいですし、教員としてサポートするにも日本のことをそこまで知らないためサポートも難しく、色々と考えさせられました。
- ・「三重の文化と社会」という科目ではありますが、既に行った対象地域も多くなってきたということですので、三重県以外の都市や地方との比較といった視点を入れたら面白くなるのかと思いました。
- ・今後もこの科目は続ける意義は大きいと思う。こういう科目こそが大学院の授業だなと感じた。

- ・ご講演にもあったように、今後も続けていくことには意義があると思いましたが、留学生や社会人の院生が増えている中で、受講生の量・質をどのようにするかはとても難しい課題だと思ふ。
- ・文化学科（地域文化論専修）は、担当をローテーションとしているが、日ごろから地域との結びつきの強くない分野や文献学、外国の事象を扱っている等の教員の場合、担当することはかなり困難ではないかと改めて感じた。
- ・地域の大学院として当該科目の意義は大きいと考えるが、規模（参加者）の維持、クオリティの保証、そして自治体側の協力といった点で、今後も担当者の負担は重く、そのあたりをどう改善していくことができるのだろうか、といったことを考えました。
- ・ぜひ継続して欲しい科目です。
- ・全体での研修会にしたところは良かった。はじめて知った方も多かったと思います。
- ・地域側のオーダーを聞いて、テーマ設定することもありでは。
- ・院生にとって大変意義ある授業だと思います。
- ・地域文化論専攻の歴史以外でも、過去の受講生がこの授業で修論の題材を得られたことがわかった。これまでの取り組みをまとめてくださり、とても有意義な報告だった。
- ・まず自分のところに院生がいなくて関わりづらいというのと、私の専攻分野で三重の文化と社会というテーマに関連づけるのはなかなか難しいので、教員により温度差が大きいと思いました。
- ・現地報告会の教員の参加を促すために旅費の補助をしていたかと思いますが、ぜひ維持していただきたいと思ふし、それ以外にもペナルティではなくベネフィットになるような仕組みがあったらいいなと思ふました。
- ・担当されている先生方には本当にご苦勞ですが、機長な教育成果を生み出されてきたと思ふます。人文社会科学研究科の大きな柱になっていると信じます。
- ・意義深い授業であり、多くの教員の参画と組織的な支援が求められる。
- ・過去の経緯がわかってよかった。
- ・関係の先生方に深く御礼申し上げます。ありがとうございます。

#### 4. 今後の大学院FD活動について、ご意見、ご要望を自由にお書きください。

- ・今回のように、全体で共有できるテーマを取り上げて欲しいです。
- ・志望者増加策と学力をはじめとするクオリティの維持について、社会人院生の指導について

#### 総括

大学院のFDについては、指導学生を持つ教員とそうではない教員との間で議論を共有することが難しいといった問題があることから、今回のように全体で共有できるテーマは概ね好意的に受け入れられた。今後も大学院に関して直面する問題や全体で共有できるテーマを選ぶなど、需要を踏まえたFD活動が行われる必要があるだろう。



## VII. 教員による「FD活動に関するアンケート」





## Ⅶ. 教員による「FD活動に関するアンケート」

### 1. アンケートの概要

#### (1) 目的と方法

1月教授会(2020年1月8日)において、来年度以降のFD活動をより有意義なものとするために、今年度のFD活動と今後に向けての要望等についてのアンケート調査を実施した。アンケート用紙は教授会終了時(センター試験説明会が連続していたため)とメールで配布し、大会議室外および学務担当に設置したボックスで回収した。以下、アンケートの結果を示す。

#### (2) 質問項目(巻末資料)

質問項目の大きな分類は次の通りである。(I)6月FD研修会について、(II)今後の大学院FD活動について、(III)学生授業アンケートについて、(IV)教員アンケートについて、(V)今年度のFD活動全般について。質問の詳細は、巻末資料を参照されたい。

### 2. 分析結果

#### 概要

人文学部教員24名から回答を得た。昨年度は33名であった。2019年度については学科別の集計も行った。以下、回答内容の概要を記しておく。

6月FD研修会に関する興味等(「興味を持ってましたか」「役立ちましたか」)については、昨年度と回答傾向はほぼ同じだが、「大いに興味を持てた」の回答数が昨年度よりもやや増加しており、今年度の研修会への評価は非常に高いと言える。

自由記述で意見が最も多く寄せられたのが、今年度のFD活動全般についてである。留学生問題に関して学内職員を講師とする講演(9月講演会)への評価と、教員が学科を超えて共通に理解すべきテーマを取り上げることへの期待が見て取れる。学生授業アンケートについては、Web化に伴う回答率の問題、授業内にスマホで回答させることによる授業時間削減の弊害、回答項目やその活用に関する問題が指摘されている。教員による授業アンケートについては、項目の再検討と、近年増えている特任教員へのフォローの必要性が指摘されている。また、昨年度に引き続き、大学院FDに関して、「三重の文化と社会」学内報告会、同現地報告会、修士論文発表会への教員の参加が少ないとの指摘がある。大学院教育の充実のためにも、各教員の参加意欲を高める必要がある。

## ① 6月FD研修会

6月研修会：テーマ「2018年度授業アンケートの自己分析とそれにもとづく授業改善方法」

### VII-1 興味を持ってましたか

	計	大いに	やや	あまり	全く	不明	不参加
人文学部	25	10	13	1	0	0	1
		40%	52%	4%	0%	0%	4%
文化学科	18	8	10	0	0	0	0
		44%	56%	0%	0%	0%	0%
法律経済学科	6	2	3	1	0	0	0
		33%	50%	17%	0%	0%	0%
不明(その他)	1	0	0	0	0	0	1
		0%	0%	0%	0%	0%	100%

### VII-2 役立ちましたか

	計	大いに	やや	あまり	全く	不明	不参加
人文学部	25	10	14	0	0	0	1
		40%	56%	0%	0%	0%	4%
文化学科	18	8	10	0	0	0	0
		44%	56%	0%	0%	0%	0%
法律経済学科	6	2	4	0	0	0	0
		33%	67%	0%	0%	0%	0%
不明(その他)	1	0	0	0	0	0	1
		0%	0%	0%	0%	0%	100%

### 自由意見

- ・ あきることなく、毎回（毎年）、新しい発見があります。
- ・ 授業評価ではなく、演習の進め方、卒論指導のやり方などを（運営方法）テーマにしては。

## ②今後の大学院FD活動について

### 自由記述

1. 「三重の文化と社会」学内報告会、同現地報告会、修士論文発表会でのアンケートについて

- ・FD活動自体は悪くないのですが、参加者が少ないので、もったいないと感じます。
- ・どれか一つに参加することをもう少し訴えてもよいかもしれません。
- ・大学院生がいないので身近には感じられなかった。

## 2. 研修会や講演会で取り上げて欲しいテーマ

- ・大学院の改組について、他大学院の動向と、院生数、倍率、進路などを知りたい。
- ・大学院生の進路

## ③学生授業アンケートについて

### 自由記述

- ・現状で問題ないと思います。
- ・このままでよいと思う。
- ・アンケートを行うことがまず大事ですが、その活用についてももっと考えるべきかと思えます。
- ・学期の最後にすると、授業内容を終えることに気をとられ忘れます。
- ・マンネリ化していてやっても意味がないどころか、授業時間が削られるので有害である。
- ・授業の教授法や、大学の事務と教員の役割の区別も知らない学生に、「自分ならこうする」という視点で書かせるのはやめてほしい。事務関係にするべき苦情や、大学の予算として無理なことまで、教員個人のアンケートに書かれるのは困るし、教員のモチベーション低下につながる。

## ④教員による授業アンケートについて

### 自由記述

- ・現状で問題ないと思います。
- ・おそらく授業に活用するものを問う項目にMoodleがあったと記憶しておりますが、項目に含める以上は、特任教員にもそのシステムや活用法についての説明がなされた方がよいと思います。
- ・内容の見直し、修正を考えてはどうでしょうか。(もう慣れた、慣れすぎたという感もあり)
- ・質問項目にあまり意味があるように思えない。授業に取り入れている選択肢について(Moodle、ディスカッションなど)学生の意欲を高めているかどうか、重ねて聞いてもいいと思う。
- ・あまり実質的な意味がないように思う。

### ⑤今年度のFD活動全般について

#### 自由記述

- ・よい活動だったと思います。
- ・これくらいのペースで継続してほしいと思います。
- ・3つを2つに縮小しても問題ないと思います。
- ・講演会は、現在のように学内の学生支援担当者のお話がいいと思う。
- ・9月講演会と11月講演会は、教員が共通に理解すべき、かつ、実際になかなか情報を共有しにくかったテーマで有意義でした。今後も同じような方向性での研修をお願いします。
- ・FD研修会は教員間の話しあいの機会として定着しているように思う。
- ・6月研修会はこれまでプログラム単位で行われてきたが、メンバーが固定され、毎回同じ話になり新鮮味がないので、単位を組み替えてはどうか。他プログラム、他コース、他学科の人の話を聞くのも参考になると思う。
- ・9月講演会しか参加しておりませんが、日頃、学部内の事情を把握できずにおりましたので、他の先生方のご意見を伺うことができ、参考になりました。
- ・次年度の要望ですが、「障害者差別解消法」の施行（H28.4月）に伴い、国公立大学では障害者への差別的取扱いの禁止と合理的配慮の不提供の禁止が法的義務となりました。この点をふまえた全教職員へのFDが不可欠なのではないかと考えています。全学の障害学生支援室の協力も得られると思いますので、ご検討をお願いいたします。

## 卷末資料











## [巻末資料3] 2019年度FD活動に関するアンケート

※入口のボックス回収箱に提出お願いいたします。

所属 (○印) :     1. 文化学科            2. 法律経済学科

### I. 6月FD研修会について、以下の質問にお答えください。

※テーマ：昨年度の授業評価アンケートの分析と改善方法等について

(1) 興味をもてましたか。

1. 大いに興味をもてた     2. やや興味をもてた     3. あまり興味をもてなかった  
4. 全く興味をもてなかった     5. わからない     6. 不参加

(2) ご自身のFDに役立ちましたか。

1. 大いに役立った     2. やや役立った     3. あまり役立たなかった  
4. 全く役立たなかった     5. わからない     6. 不参加

(3) 研修会の内容、運営の仕方などについて、ご意見があればお書きください。

### II. 今後の大学院FD活動について

1. 今年度も大学院FD活動として「三重の文化と社会」学内報告会、同現地報告会、修士論文発表会でのアンケートを予定していますが、この点についてのご意見があればお書きください。

2. 研修会や講演会で取り上げてほしい大学院FDに関するテーマがありましたらお書きください。

裏面へ

---

### Ⅲ. 学生授業アンケートについて

学生授業アンケートについて、ご意見があればお書きください。

### Ⅳ. 教員アンケートについて

学生授業アンケートと同時に実施している教員アンケートについて、ご意見があればお書きください。

### Ⅴ. 今年度のFD活動全般について

今年度はこれまで、6月研修会（昨年度の授業アンケートの分析）、9月講演会（留学生問題）、11月研修会（大学院FD、三重の文化と社会）を行ってきました。評価できる点、改善すべき点、また今後のご要望など、ご意見がありましたらお書き下さい。

ご協力ありがとうございました。

## 2019年度人文学部FD委員会 年間活動

### 一. 委員会の構成

委員長：塚本明 委員：田中亜紀子、川口敦子

### 二. 委員会の開催

#### 第1回FD委員会 4月17日（水）

1. 2019年度FD活動についての考え方
2. 年間計画について
3. 予算について
4. FD講演会のテーマについて
5. その他

#### 第2回FD委員会（メール審議）5月15日（水）

1. 6月FD研修会について
2. 9月FD講演会について
3. その他

#### 第3回FD委員会 7月17日（水）

1. 6月FD研修会（確認と反省）
2. 授業アンケート・教員アンケートについて
3. 9月FD講演会について
4. 大学院FDについて
5. FD活動報告書の内容について
6. その他

#### 第4回FD委員会 11月20日（水）

1. FD活動についての教員アンケートについて
2. 後期授業アンケート（学生・教員）について
3. 三重の文化と社会（学内・現地）、修論発表会の学生アンケートについて
4. FD活動報告書について（分担）
5. その他

#### 第5回FD委員会（メール審議） 12月25日（水）

1. 授業アンケートとFD活動教員アンケートの内容について
2. 三重の文化と社会（学内・現地）、修論発表会の学生アンケートの内容について
3. その他

#### 第6回FD委員会 3月23日（水）

1. FD情報交換会について（報告）

2. 今年度のFD活動の総括と反省
3. FD活動報告書について
4. 来年度のFD活動について（引き継ぎ）
5. その他

### 三、FD研修会の開催

6月FD研修会 6月12日（水）14:00～15:00  
 両学科のカリキュラム単位（計8つ）ごとに実施。  
 テーマ：2018年度実施授業アンケートの自己分析と改善方法  
 内容：報告に基づく質疑応答と討議

### 四、FD講演会の開催

9月FD講演会 9月11日（水）14:00～15:10  
 会場：人文学部大会議室  
 講師：郡一樹氏（三重大学入試チーム [元人文学部学務チーム、国際交流チーム]）  
 演題：本学における留学（受入・派遣）の現状と今後の展望

### 五、FDアンケートの尾実施

- (1) 授業アンケート（前期・後期）の実施  
 ユニバーサルパスポートにより実施
- (2) 教員授業アンケート（前期・後期）の実施  
 学生による授業アンケート期間に実施  
 講義・演習のあり方や工夫等に関して尋ねるアンケート
- (3) FD活動総括アンケートの実施  
 年間を通したFD活動（研修会、講演会、授業アンケート）に関して教員に意見を求めるアンケート。

### 六、大学院関係FD活動

- (1) FD研修会 11月13日（水）  
 会場：人文学部大会議室  
 講師：豊福裕二氏（法律経済学科）  
 演題：「三重の文化と社会」について  
 ＊内容：報告に基づく質疑応答、討議。
- (2) 大学院授業アンケートの実施  
 前期・後期アンケート（ユニバーサルパスポート）期間に実施  
 当該大学院生が履修した授業科目全体に関するアンケート

(3) 授業科目「三重の文化と社会」院生報告会（学内・現地）でのアンケート実施

1月20日（月）学内発表会で実施

1月25日（土）現地報告会（「地域研究フォーラム」、於：四日市市総合会館）で実施。

\*なお、例年実施している修論発表会は、新型コロナウイルス感染のため中止となった。

---

2019年度三重大学人文学部におけるFD活動報告書

発行 2020年3月31日

編集 三重大学人文学部FD委員会

(塚本明、田中亜紀子、川口敦子)

印刷 合資会社 黒川印刷

---

